

特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性

岸田 由佳¹・大谷 正人²

Possibility of an Art Therapeutic Approach in Special Needs Education.

Yuka KISHIDA, Masato OTANI

〈抄 録〉

本研究は、特別支援教育においてアートセラピー的なアプローチをおこなっていくことを目的とし、その可能性の検討をおこなった。研究1では、三重県内の特別支援学校を対象にアートセラピー的教育との関連から見た特別支援学校教育の実態をアンケート調査により把握し、結果の概要と分析をおこない特別支援学校におけるアートセラピー的教育の位置づけの可能性を検討した結果、自立活動に関する教育活動全般においてと図工・美術教育活動との関係性があると示唆された。研究2では、教師の生徒理解を深めるためのカウンセリング的機能をいかした授業の取り組みという視点から、アートセラピー的な教育実践を三重県内特別支援学校2校においておこない、その効果を検証し、その授業の問題点・改善点を挙げ、アートセラピー的教育実践のアプローチの可能性について考察した。その結果、アートセラピー的なアプローチをおこなうことによって、生徒についての理解が深まった。アートセラピー的アプローチは、今後の支援の手立ての構築の一つの手法として活用していくことができる可能性があることが明らかとなった。

キーワード：アートセラピー、生徒理解、特別支援教育

I. 問題と目的

1. はじめに

特別支援学校において昨今生徒の重度・重複化や多様化が進んでいる。言語を用いてのコミュニケーションが非常に難しいのが現状である。生徒にとって言語でのコミュニケーションが取りにくいため理解が得られずストレスなどの要因になっていると思われる。また、特別支援学校においては、スクールカウンセラーが配置されておらず、心理的な不安を相談する機会が学校においては教師に対してのみと限られた環境にある。そこで学校教育の中でカウンセリング的機能をいかした授業を取り入れる取り組みが必要と考えた。カウンセリング的機能をいかした授業として、音楽療法は、学校現場に取り入れられてきており、教師間において知られてきているが、アートセラピーについては、まだ学校現場の授業の中に取り入れられていない現状があり、教師間においてもあまり知られていないのではないかと考える。そこで本研究では、三重県内の特別支援学校の教職員を対象としたアンケート調査を実施して現状を把握した上で、アートセラピーを用いた教育実践をおこない可能性を探って発信していきたいと考える。

1 三重大学大学院教育学研究科

2 三重大学教育学部

2. 目的

目的を次の2点とする。

第1点目は、三重県内特別支援学校の教職員（図工・美術担当者）を対象とした「図工・美術教育における指導のあり方について」のアンケート調査と特別支援学校の教職員（自立活動・教務担当者）を対象とした「自立活動における指導に関する調査」を実施し、結果の概要と分析をおこない特別支援学校におけるアートセラピー的教育の位置づけの可能性を探る。

第2点目は、生徒の言葉にされない内面を注視したりしながら、同時にさまざまな素材を用いてカウンセリング的機能をいかした授業、アートセラピー的教育実践をおこない、その効果を検証し、授業の問題点・改善点を挙げ、アートセラピー的教育実践のアプローチの可能性について考察する。

3. アートセラピーのこれまでの流れと本研究の立場

(1) アートセラピーについて

アートセラピーは、「アート」と「セラピー」の二つの言葉を組み合わせた合成語である。そのため、アートセラピスト自身のバックグラウンドがどちらであるかによって、「アート（アート・アズ・セラピー）」制作を主眼にする場合か「セラピー（心理療法）」を基本に置く立場か、といったように治療上のスタンスが異なってくる。また、背景となる心理学は、治療の対象者や目的に応じて、さまざまなアプローチがある（関 2008）⁸⁾。この二つはどちらがただしいということではなく、アートセラピーを受ける人のニーズによってどちらのアプローチが向いているかを判断し、使い分けることが必要であると関（2004）⁹⁾は、述べている。

本研究では、「アート・アズ・セラピー」のようにアートする行為そのものの中に治療的な働きがあると考え、創造的な自己表現に着目した研究（関 2004）⁹⁾という視点からのアプローチを考えている。

さまざまな手法での自由な自己表現を通して作品の結果からだけでなく、作品の制作過程にも着目し、生徒との協働作業をすることによって生徒が自己成長する支援をおこないたいと考える。

(2) なぜアートを用いるのか

アート制作が人の心を癒し、言葉で表現しづらい気持ちや感情を表現することを可能にすることだと言われている（瀬崎 2007）¹⁰⁾。また言葉という思考中心の回路からでは出てこないような、心の底に眠っている思いが現れることもある（山上、山根 2008）¹³⁾。他にも、感覚器官に対する刺激や制作にともなう運動が心身の機能回復・維持に役立つことや、ものづくりの楽しさや達成感が生活の質を高めることが言われている（瀬崎 2007）¹⁰⁾。アートそのものがもつ素晴らしさや喜び、人間性や魂の表現として人々を感動させるアートの本質的な部分に触れることを大切にしながら教育実践をおこないたいと考える。

4. アートセラピー的教育実践の手法について

(1) コラージュ療法

コラージュ（collage）とは、フランス語で「糊（にかわ）づけすること」を意味する。新聞、雑誌、パンフレットなどの文字や写真を任意に切り抜き、それを画用紙に貼り合わせる方法である（森谷 1995）⁹⁾。使われるようになったのは、1972年のアメリカ（Buck & Provancher, 1972）で作業療法の一つとして精神病患者などを対象に心理療法として実施された。

今回は、あらかじめセラピスト自身が日頃から、絵や写真、文字などおもしろそうな材料を集めて切り抜き、それを箱の中に入れておくコラージュ・ボックス方式を応用した。

(2) 9分割統合絵画法

森谷 (1995)⁶⁾のオリジナル方法である。

①方法について森谷 (2003)⁷⁾は、次のように述べている。

- a. A4用紙に、枠をつけ、3×3に分割する。
- b. 教示、逆“の”の字に左上から反時計回り、または中心から時計回りに、順番に一コマずつ思い浮かぶものを自由に描いていく。文字や記号や形などを書いてよい。
- c. 自由連想法を描画にしてもよいし、状況に応じて課題画としても利用できる。
- d. すべて描き終わったら、各絵に簡単な説明か、言葉を記入し、彩色する。
- e. 最後にタイトルをつける。

②特徴について森谷 (2003)⁷⁾は、以下の点を指摘している。

- ・錯綜し、まとまるのが困難なイメージを包括的、統合的に表現可能。
- ・クライアントの心の中に去来するさまざまな視覚的、言語情報を収集し、整理する方法。
- ・多くの枠があることで、矛盾するような表現を同時に表せ、いろいろな側面からクライアントの様子を知ることができる。
- ・イメージ全体を一挙に把握できる。
- ・テーマを指定できる。
- ・描画面積が小さいので、絵が苦手な人にも抵抗が少ない。

(3) 色のイメージ (色のライフヒストリー)

色のヒストリーについて水島 (1998)⁴⁾は、次のように述べている。色のヒストリーは、自分の「分子色彩」を知るためのもの。つまり色による自分史を編むことで、色彩感覚の傾向や色彩嗜好のルーツを知ることができる。人それぞれ色のヒストリーは違う。過去の体験に気づき、過去を再統合する契機になる。今回は、年齢別に思い出された色を貼っていくという従来の方式ではなく、最初に色を限定し色を漢字で書きこんだワークシートに思い出したことを記入し、色数の多い「新配色カード 199 a」日本色研事業株式会社から思い出した事例がどの色に一番似ているかを選ぶオリジナルな方式でおこなった。

II. 方法

1. アンケート調査について

(1) アンケート調査の対象者

- ① 三重県内特別支援学校 14 校 (分校も含む) に在籍する教職員図工・美術担当者にアンケートの回答を依頼した。
- ② 三重県内特別支援学校 14 校 (分校も含む) に在籍する教職員自立活動・教務担当者にアンケートの回答を依頼した。

(2) 調査時期

- ①②とも 2008 年 11 月～12 月

(3) 調査の視点

アートセラピーについての意識調査と図工・美術教育における指導のあり方についての調査を実施した。三重県内の特別支援学校では、美術の教科免許状取得者だけではなく授業担当をすることが多いので免許状の取得の有無にかかわらず、各校、図工・美術担当代表者にアンケート調査の依頼をした。自立活動における「心理的な安定」領域に関する指導は、自立活動の時間内だけでなく、

教育活動全般にわたって指導されていると考え、情報収集として自立活動における「心理的な安定」領域に関する指導方法についての調査を実施した。また、アンケート各項目の内容は、結果のところで示した。

2. アートセラピー的教育実践について

(1) 授業の対象

- ①三重県内 A 特別支援学校（知的障害）中学部 1 年生 5 名（男子 3 名、女子 2 名）
- ②三重県内 B 特別支援学校（肢体不自由）中学部 3 年（単一障害）1 名（女子）

(2) 授業の実施

上記の①については、生活単元学習 2 時限続きで実施し、②については、家庭科 1 時限の授業を計 3 回実施した。

(3) 授業の立案、準備、実施

指導案は筆者が作成し、研究協力校学級担任、学部所属教職員の協力のもと筆者が授業をおこなった。また、その準備としてアートアルバムもしくは、アート記録シートを作成した。活動中だけでなく、活動後も何度もふり返って見直せるようにし、成長や変化がわかりやすいようにした。

3. 授業内容

(1) アートセラピー的教育実践の設定

アンケート結果をもとに現状を把握してアートセラピー的教育実践の教育課程における位置づけを検討し、研究協力校における生徒の現在地の把握をしてうえで教育実践の内容を設定した (Figure 1)。

アートセラピーの手法の中から生徒が「自己理解・他者理解」を深められるもの、「心理的な安定」が得られるもの、「自己表現」につながる活動に視点をおき、生徒にあったものを抽出して実践した。

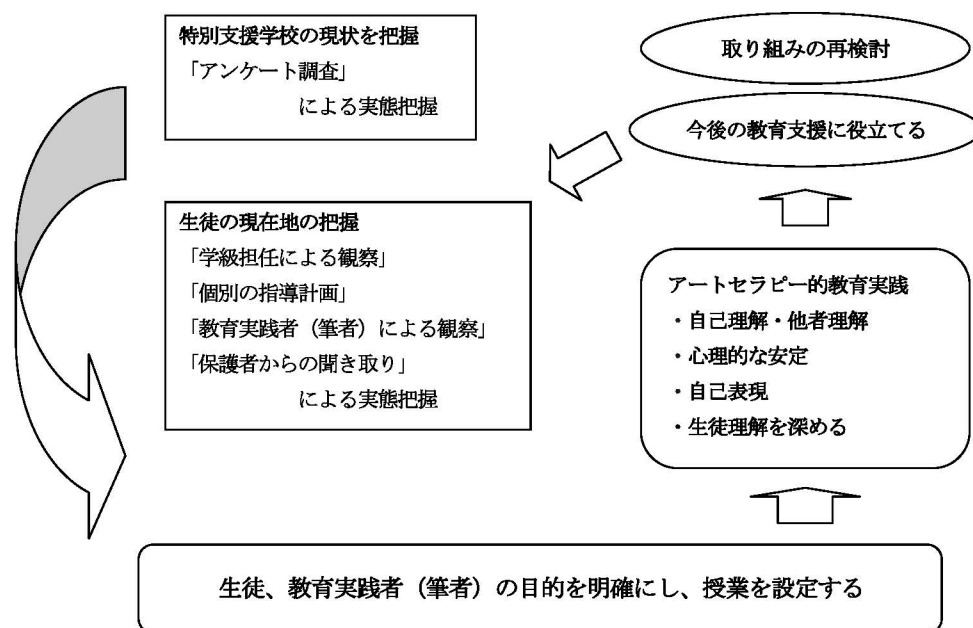


Figure 1 アートセラピー的教育実践の設定

現在地（生徒の状態を把握する）→目的（子どもたちの発達を援助する上で必要な課題を見つける）→方法（アートセラピー的教育実践の内容、展開の仕方を考える）を明らかにした上で実践を繰り返した。作品をアートアルバムにまとめ生徒および教育実践者（筆者）がふり返り、今後の教育支援に役立てた。

(2) アートセラピー的教育実践の題目と実施日

各校のアートセラピー的教育実践の授業の題目と実施日を以下に示した（Table 1）。

Table 1 アートセラピー的教育実践の授業の題目と実施授業

三重県内特別支援学校（知的障害）中学部1年生5名（男子3名、女子2名）	
アートセラピー的教育実践の授業の題目	実施授業
1回：「パラシュートをつくろう」（集団描画・コラージュ）	生活単元学習3・4限目
三重県内B特別支援学校（肢体不自由）中学部3年（単一障害）1名（女子）	
アートセラピー的教育実践の授業の題目	実施授業
1回：「自分の成長をふり返ろう」（コラージュ）	家庭科3限目
2回：「自分の成長をふり返ろう」（色のイメージ）	家庭科3限目
3回：「自分の成長をふり返ろう」（9分割統合絵画）	家庭科3限目

(3) アートセラピー的教育実践者（支援者）の役割

制作している段階での生徒の動きや発語に注目した。アートセラピーの基本的な考えは、生徒と支援者との協働作業であり、セラピーが促進されるよう生徒が安心して自分を表現できる場をつくること、アート制作を通じて、自己成長や変容を達するための援助活動なので双方が主体的であることが望まれる（瀬崎 2007）¹⁰⁾。

4. アートセラピー的教育実践の効果および評価について

(1) 事前実態調査

研究校において生徒の実態を学級担任から聞き取りをおこなった。また、授業観察および体験実習をおこない、生徒の実態把握に努めた。研究校B校における個別教育実践の生徒は、個別の指導計画を基に教育実践をおこなった。

(2) 授業実践後の評価

①自己評定法としてふり返りシートによる分析と考察

子どもが自分の学びをどのように解釈し、意義づけ価値づけているかが重要であるので、教師による実践評価だけでなく自己評価を重視した。ふり返りシートでは、「すごく」「まあまあ」「あまり」「ぜんぜん」の4件法で評定をもとめた。考察の視点は、以下の4項目である。

- i. 実施したアートワークのねらいがどの程度達成されたかを数値化して検討する。
- ii. アートワークの評価を数値化して検討する。
- iii. すべての項目についての数値を教育実践者（筆者）としての反省材料として検討する。
- iv. 教育実践を数回実施した実践においては、各回における変化を調べ検討する。

授業（活動）終了後実施するふり返りシートに思ったこと、感じたことを自由に記述する欄をもうけた。生徒が自分をふり返り自分が感じていることや考えていることを「書く」活動をすることで明確にできる。そのことによって自分自身を見つけたり、自分自身について新たな発見をしたりすることができるので、生徒の記述による感想から教育実践者（筆者）は、ねらいに合わせた子どもの思いや学びを探り検討した。

「子どもが何にこだわっているのか」「何に困っているのか」「どうしたいと願っているのか」「どのような認識が培われているのか」「行動に対する意識の変化はどうか」などさまざまな視点から子どもを見つめ検討する。また、コメントを書き込んだり対話をしたりしながらその子のよさを価値づけたり、支援の方法を構築した。

②他者評定法として

a. 教育実践者（筆者）および学級担任および授業に入った教職員による生徒の行動観察

集団の授業の場合、授業（活動）をおこないながら生徒の変化を読み取ることは、不可能なので授業（活動）実施前、と実施後に打ち合わせの時間を設定し、生徒の様子の変化やその後の様子などの交流をおこなった。

また、上記に記述した生徒自身での自己評価が難しい場合、教師の観察視点からの評価をおこなった。アートセラピー的教育実践では、制作途中の生徒の様子が重要である。授業途中の生徒の様子を記録用紙に記入することを教育実践者（筆者）および授業に入った教職員がおこなった。ビデオ撮影が認められた研究校 A においてはビデオ録画をおこない分析と考察をおこなった。

b. 教育実践者（筆者）の指導のあり方や教育実践内容の問題点、改善点の分析と考察

効果的な教育実践を継続するために欠かせないことは、教育実践者（筆者）の教育実践を評価することである。そこでアンケート・教育実践評価を作成し、記名・匿名を選べる形式にし、授業に入った教職員から評価を得た。評価の内容は、瀬崎（2007）^{10）}を参考に筆者が考え作成した。「大変・とても」「それなりに」「あまり」「まったく」の4件法で評定を求めた質問項目と感想や意見を記述式で回答を求めた。

c. スーパービジョンおよび事例検討

スーパービジョンや事例検討は専門家から受けた。

(3) 記録と作品の保存

事前実態調査および授業後の評価をファイルした。制作過程の写真および作品のアートアルバムもしくは、アート記録シートを作成した。それらにより、生徒、教職員、保護者が作品を系統的に見て振り返ることができるようにした。

Ⅲ. 研究1. アンケート調査における結果と考察

1. 図工・美術担当者を対象とした「図工・美術教育における指導のあり方について」のアンケート調査

三重県内の特別支援学校14校（分校を含む）のうち2008年12月に回収できた13校、65名についての結果の概要と考察をおこなった。回収率は95%であった。アンケート調査の内容は、まず1点目は、三重県内の特別支援学校における「アートセラピー」の意識調査である。アートセラピーが美術教育から発展していった流れがあることから図工・美術担当者に回答を依頼した。もう1点は、特別支援学校における図工・美術の実態調査をおこない、アートセラピーとの関連性を見出し、アートセラピー的教育実践を図工・美術教育の中で位置づけることができるかどうか調査した。

(1) アートセラピーについて

質問項目、「1. アートセラピーを知っていますか」「2. アートセラピーを実際に体験したことがありますか」「3. アートセラピーを教育実践されたことがありますか」「4. アートセラピーについて」4項目の結果概要と考察を次に述べる。

①アートセラピーの知名度

Figure 2より「知っている」と回答した図工・美術担当者は、わずか12% (N=65)であった。

このことから、学校教育現場においてアートセラピーについての認識度はかなり低いことがわかった。

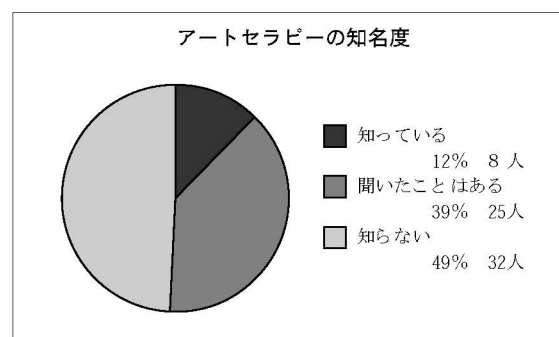


Figure 2 アートセラピーの知名度 (N=65)

②アートセラピー体験

実際にアートセラピーを体験したことのある図工・美術担当者はわずか3% (N=65)であった。

教職員自らが体験したことがないので学校教育現場に取り入れていくのはかなり難しい状況にある。実際に体験することを通してセラピーがおこなえると考えるので「アートセラピー」的教育実践をおこなうには、まず、教職員への体験の場の設定が必要不可欠である。

③アートセラピー的教育実践の実施

1校1例のみで「子どものストレス解消という面からすると大画面に手や筆はけなどでダイナミックに着色して作品を作り上げたりすることがある」というものだけであった。

④「アートセラピー」の考え方について

質問項目は、8項目である。「1. アートセラピーについて興味がある」「2. アート表現は上手下手で評価されるものではない」「3. 子どもが自己発見したり教師が児童・生徒の理解を深めたりする上で必要である」「4. 言語を超えたコミュニケーションの方法として用いることができる」「5. ユニークな芸術材料および手法によって、児童生徒のモチベーションを高め、創造性を刺激できる」「6. アートは自己回復や癒しや元気を得る力になる」「7. アートによる心の育ちは重要である」「8. アートセラピーを教育現場にとり入れた方がよいと思う」とした。各項目に対し、とても当てはまる(5点)、ほぼあてはまる(4点)、どちらともいえない(3点)、あまりあてはまらない(2点)、まったくあてはまらない(1点)の5件法での回答をもとめた。無回答は、省いて分析をおこなった。

a. 「アート表現は上手下手で評価されるものではない」

アートセラピーにおける基本的な考え方において Figure 3より94% (N=54)の支持を得ていることから本来の図工・美術の授業において芸術指向(技術面重視指向)が高いというわけではないということが言える。

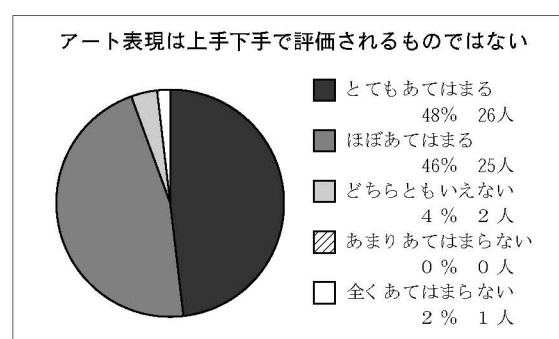


Figure 3 アート表現の評価

b. 「アートによる心の育ちは重要である」

Figure 4 よりアートする行為そのものの中に治療的な働きがある（関 2004）⁹⁾と考えられているようにアートによる心の育ちは重要であると回答する図工・美術担当者が約 8 割（N=53）であった。

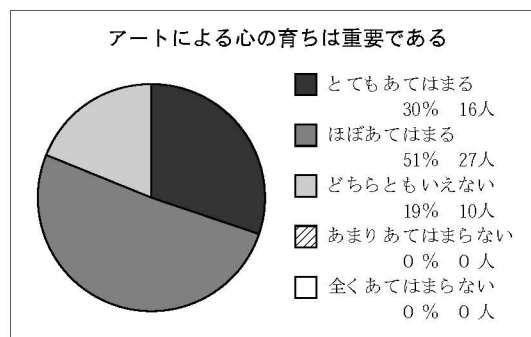


Figure 4 アートによる心の育ちは重要である

c. 「アートは自己回復力や癒しや元気を得る力になる」

アートセラピーについての知名度は、低いものではあったが本来の図工・美術の中にもアートが自己回復力や癒しや元気を得る力になると考えている図工・美術担当者が Figure 5 より約 7 割いる（N=55）ことがわかった。この結果から図工・美術の教科の中でアートセラピー的教育実践をおこなっていくことが可能ではないかと考える。

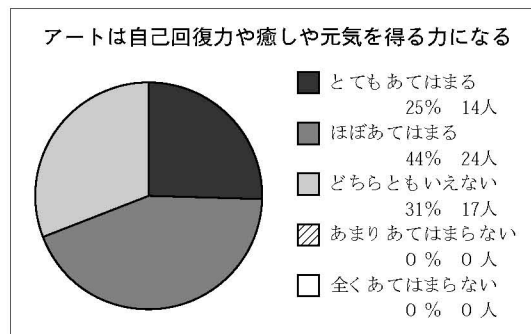


Figure 5 アートは自己回復力や癒しや元気を得る力になる

d. 「ユニークな芸術材料および手法によって、児童生徒のモチベーションを高め、創造性を刺激できる」

「できる」と回答している図工・美術担当者が、Figure 6 より 64%いる（N=56）ことから、児童・生徒にあったユニークな芸術材料を探し、さまざまな手法を用いることが重要であると考えられる。

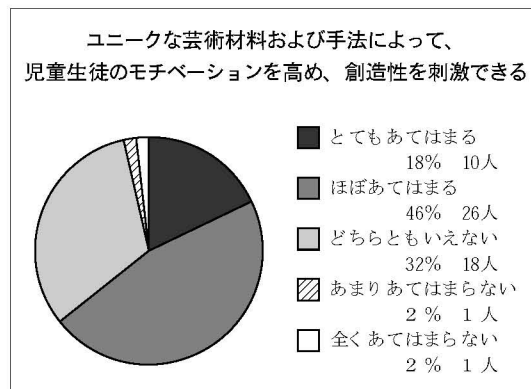


Figure 6 児童生徒のモチベーションを高め、創造性を刺激できる

e. 「言語を超えたコミュニケーションの方法として用いることができる」

「アートが言語を超えたコミュニケーションの方法として用いることができる」と回答した図工・美術担当者が Figure 7 より 6 割いる（N=55）ことから非言語のコミュニケーションとしてアートが重要な意味を持っていると考える。

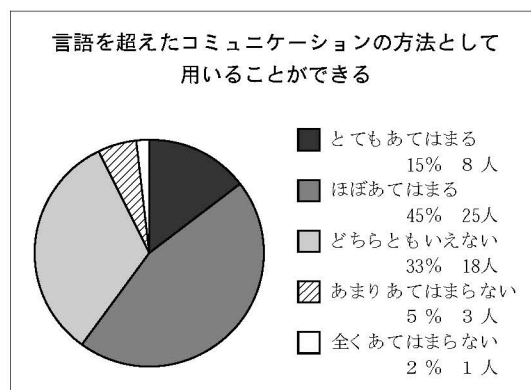


Figure 7 言語を超えたコミュニケーションとして用いる

f. 「子どもが自己発見したり教師が児童・生徒の理解を深めたりする上で必要である」

アート表現することは、子どもが自己発見したり教師が児童・生徒の理解を深めたりする上で必要であると回答した図工・美術担当者が Figure 8 より約 6 割いる (N=54) ことから「自己・他者理解」の観点からのアートセラピー的アプローチのあり方の提案をしていく必要があると考える。

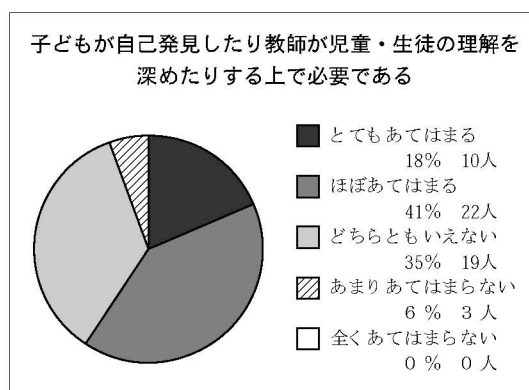


Figure 8 子ども自信が自己発見、教師の児童生徒理解

g. 「アートセラピー」について興味がある

Figure 9 より約半数 (N=55) の図工・美術担当者が、「興味がある」と回答している。このことから教育実践を発信していくことによりアートセラピーへの興味は深まるのではないかと考える。

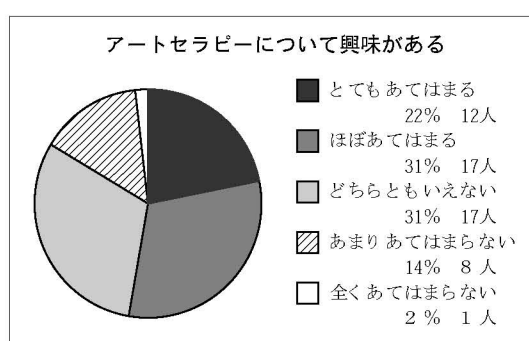


Figure 9 アートセラピーについての興味

h. 「アートセラピーを教育現場にとり入れた方がよいと思う」

Figure 10 より「どちらともいえない」と回答した図工・美術担当者が約 6 割 (N=57) であった。自由記述のところにアートセラピーについてまだよく理解していないので「わからない」と記入する図工・美術担当者が 6 名いたこととアートセラピーについて「知らない」と回答した図工・美術担当者が約半数いたことが影響していると考えられる。アートセラピーについてわかりやすくまとめて説明する必要がある。

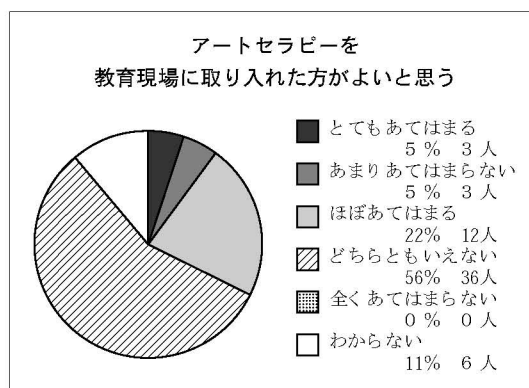


Figure 10 アートセラピーを教育現場に取り入れる

(2) 特別支援学校における図工・美術の実態調査

① 図工・美術教育に関わって重視していることについて

質問項目は、15 項目で回答を得た。「1. 学習指導要領に示されている教科目標」「2. 発達段階に見合った取り組みをすること」「3. 技能を高めること」「4. 個々の子どもの思いや願いを自由に表現すること」「5. ストレスの発散など体を解放すること」「6. いろいろな材料や素材に触れさせた体験をすること」「7. 五感力を育てること」「8. 子どもが制作を通して自己発見すること」「9. 鑑賞活動を通して友だちのよさを発見すること」「10. 作品を通して児童生徒の理解を深めること」「11. 子どもの才能を見つけること」「12. 余暇活動につなげること」「13. 集中して作業する力を育てること」「14. 保護者が感心する作品をつくること」「15. その他」とした。各項目に対し、同様に 5 件法での回答をもとめ分析をおこなった。

a. いろいろな材料や素材に触れさせた体験をすること

「あてはまる」と94% (N=63) の図工・美術担当者が回答しており最も重要視されている。アートセラピーの手法の中で柴崎 (2008)¹¹⁾ が述べているようにさまざまな素材は、アート表現のきっかけをつくったり、助けてくれたりするものとしており、自分の好みにあった素材を選ぶ、知ることが重要である。まさにいろいろな材料や素材に触れさせた体験をすることは、アートセラピーにつながると考える。図工・美術担当者が重視している教育活動とアートセラピー的な考え方は関係性があると言える。

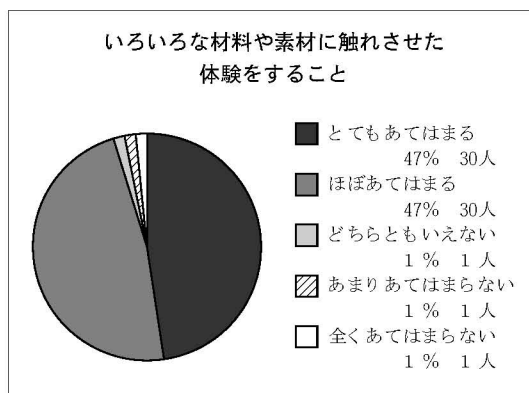


Figure 11 いろいろな材料や素材体験

b. 集中して作業する力を育てること

「あてはまる」と89% (N=63) の図工・美術担当者が回答している。筆者も集中して作業する力は育てたいと考えているが、金子 (2008)⁹⁾ は、無理やりみんなに合わせて、時間いっぱい絵に向かわせるのではなく、教材ボックスから、その子がやりたい教材を自分で選べるような複数の教材を用意するとよいとされている。大切なのは子どもたちがその時間、どれだけ充実して表現活動に取り組めたかだとしている。これは、「楽しむ」「自由に選択できる」という観点でまさにアートセラピー的手法と同じである。「集中して作業する力を育てる」という捉え方を筆者も金子のように捉えて教育実践していきたいと考える。

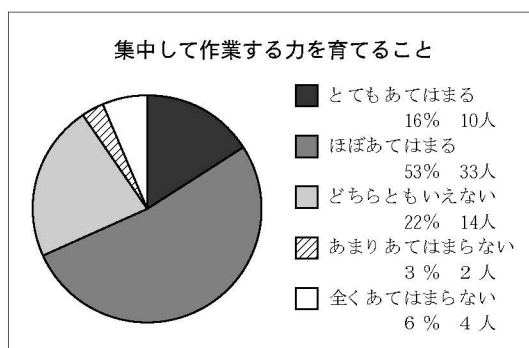


Figure 12 集中して作業する力を育てること

c. 発達段階に見合った取り組みをすること

84% (N=63) の図工・美術担当者が「あてはまる」と回答していることから発達段階に見合った取り組みが重視されていると言える。

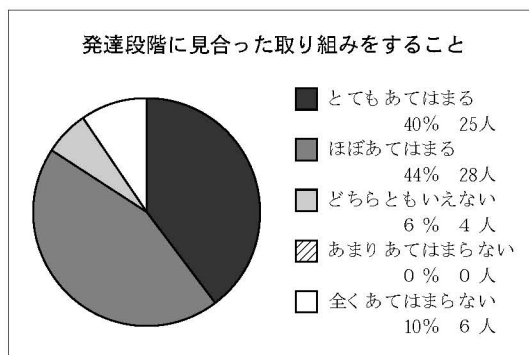


Figure 13 発達段階に見合った取り組みをすること

d. 五感力を育てること

「あてはまる」と83% (N=64) の図工・美術担当者が回答している。筆者も五感に訴えかける活動は、子どもの興味関心を引き出し、また身体感覚への刺激につながると考える。アートセラピー的教育実践の中で「感触を楽しむ活動」を通して普段見過ごしてしまいがちな子どもの姿を見つけたいと考える。

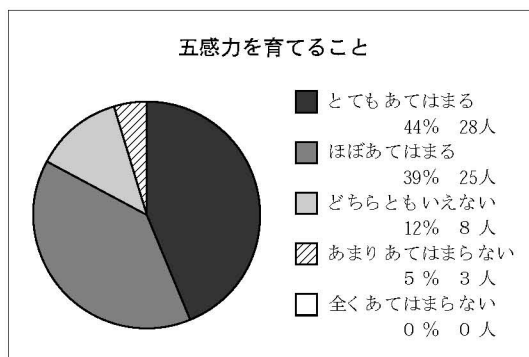


Figure 14 五感力を育てること

e. 個々の子どもの思いや願いを自由に表現すること

77% (N=64) の図工・美術担当者が「あてはまる」と回答していることから、アートセラピーにおける「自由に表現する」という活動理念と重なる部分ではないかと考える。

アートセラピー的教育実践を図工・美術教育の中でおこなっても本来の図工・美術教育からかけ離れたものにはならないと考えられる。

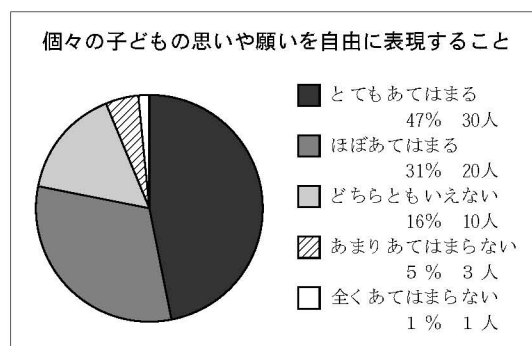


Figure 15 個々の子どもの願いを自由に表現する

f. 子どもが制作を通して自己発見すること

「あてはまる」と62% (N=64) の図工・美術担当者が回答している。アートセラピー的教育実践の中においても自己理解を深めることは、目的の一つとして取り上げて重要視している。このことから図工・美術教育の目標としていえることとアートセラピー的教育実践の中での目標は関係性があるといえる。

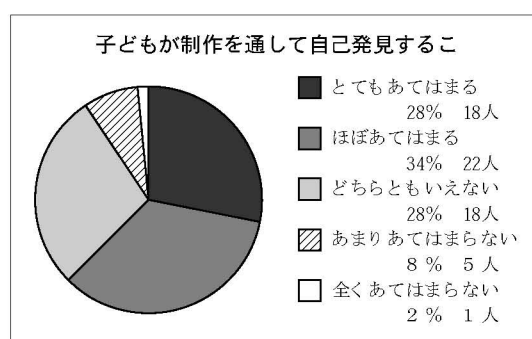


Figure 16 自己発見すること

g. 作品を通して児童生徒の理解を深めること

「あてはまる」と59% (N=63) の図工・美術担当者が回答している。アートセラピー的教育実践の中においても児童・生徒理解を深める活動を重視したいと考えている。今までの図工・美術教育においても作品から児童・生徒理解を深める活動をしてきている図工・美術担当者が約半数いることがわかった。質問項目の仕方において「制作活動や作品を通して」という質問にするべきだったと考える。

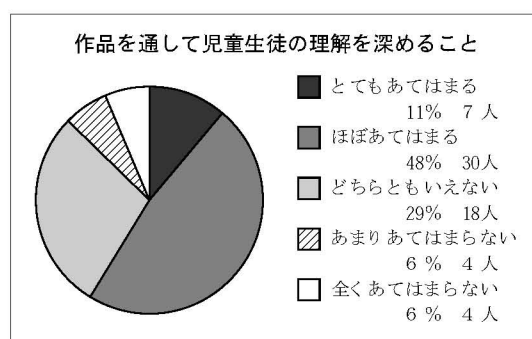


Figure 17 作品を通して児童生徒理解を深める

h. 余暇活動につなげること

「あてはまる」と57% (N=63) の図工・美術担当者が回答している。福井県立南養護学校^①で美術教育が余暇の活動の充実につながると考え実践をされていた。美術教育が充実してからアトリエに通ったり、陶芸教室に通ったりする生徒が出てきたと報告されていた。筆者も余暇活動の一つとしてつなげていきたいと考える。

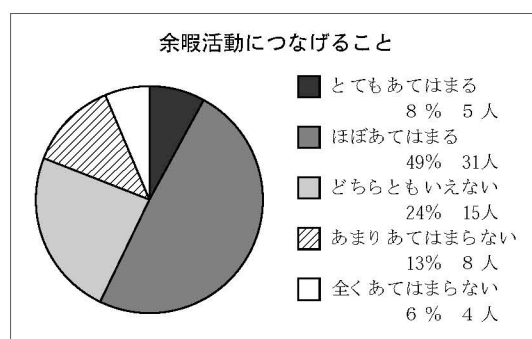


Figure 18 余暇活動につなげること

i. ストレスの発散など体を解放させること

「あてはまる」と56% (N=64) の図工・美術担当者が回答していることからアートセラピーについて知らなくてもアートする行為そのものに癒しといったアートセラピー的な要素を重視する活動を今までの図工・美術で取り組んできているのではないかと考える。このような実態から図工・美術教育の中でアートセラピー的な教育実践をおこなうことは十分可能なことと考える。

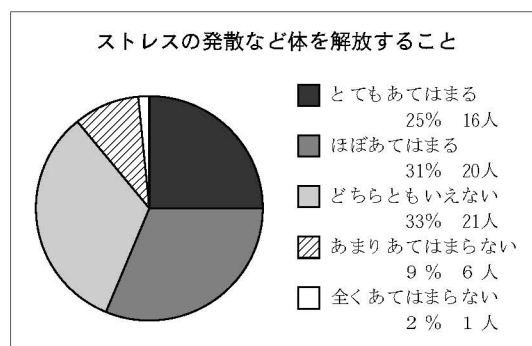


Figure 19 ストレス発散など体を解放すること

j. 子どもの才能を見つけること

「あてはまる」と56% (N=64) の図工・美術担当者が回答している。(金子 2008)³⁾ は、ほんの少しの工夫をするだけで絵の中で子どもの個性はどんどん光はじめると述べている。筆者もアプローチを工夫して子どもの才能を見つけて行きたいと考える。

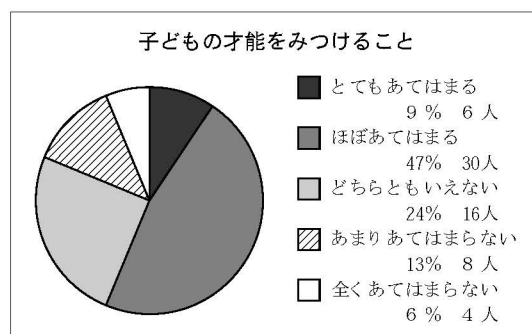


Figure 20 子どもの才能を見つけること

k. 鑑賞活動を通して友だちのよさを発見すること

「あてはまる」と52% (N=62) の図工・美術担当者が回答している。アートセラピー的教育実践の中においても他者理解を深めることは、目的の一つとして取り上げて重要視している。「どちらともいえない」が22%であるが、言語として友だちのよさを伝えることが難しい児童・生徒が多いことからかもしれないが、筆者は、言語という部分だけでなく、友だちと一緒に活動することで刺激を受けて変化することも多いので非言語においても友だちのよさを発見することにつながっていると考える。

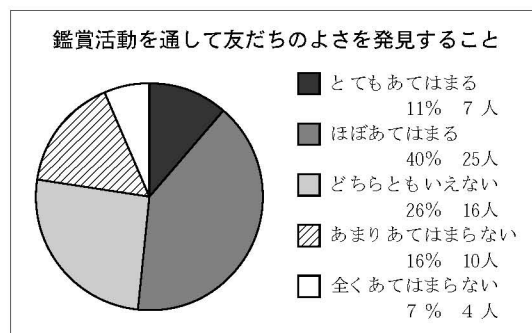


Figure 21 友だちのよさを発見すること

1. 技能を高めること

「とてもあてはまる」と回答したのは、盲学校、小学部の図工担当者2名 (N=64) であった。「まったくあてはまらない」が11%あることから技能を高めることより違うことを重視した方が望ましい児童・生徒がいるということが考えられる。一方「ほぼあてはまる」が28%で担当している児童・生徒の実態によって回答がわかれたように感じた。「技能を高めること」を目的とした活動、「技能を高めること以外」を目的とした活動の双方を組み合わせておこなうことが必要になってきていると考える。

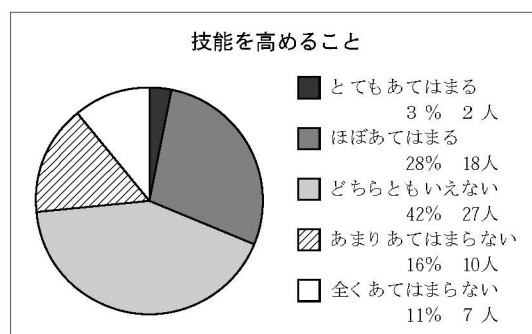


Figure 22 技能を高めること

m. 学習指導要領に示されている教科目標について

特別支援学校においては、個別の指導計画の目標に基づいて指導をおこなっている。個々によって目標とする内容はさまざま学習指導要領に示されている教科目標が個々の目標と沿わない部分やケースもあるので「どちらともいえない」と55%（N=63）が回答したと考えられる。本調査が学習指導要領改訂前に実施されたものであったので学習指導要領と学校現場の実態とのずれがあったとも考えられる。

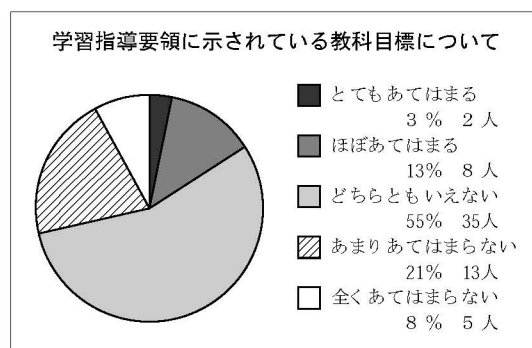


Figure 23 学習指導要領に示されている教科目標

n. 保護者が感心する作品をつくること

「あてはまらない」と62%（N=62）の図工・美術担当者が回答している。筆者が体験したアートセラピーのアトリエでは、どのような作品であっても子どもは愛着をもって制作しているし、作品は子どもの心の表れとして大事に扱うという姿勢を大切に保護者が「いらぬ、邪魔、つまらない」と拒否するのではなく「ありのままを受け入れる」という共感の姿勢をもっていたように努めていた。そのような働きかけが必要であると筆者も考える。

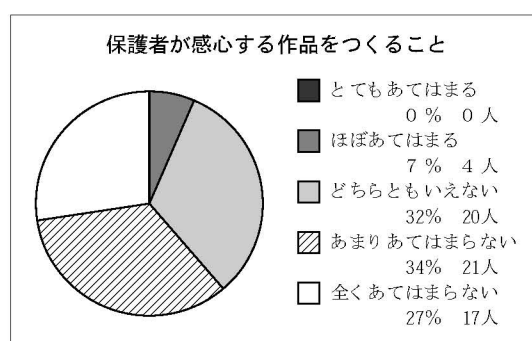


Figure 24 保護者が感心する作品をつくる

② これからの図工・美術教育のあり方はどうあるべきだと考えるか。

授業を展開する上で考慮したいことなどを自由記述で回答を得たものをカード化しKJ法による分類をおこなった。KJ法によってできた20のカテゴリーに分類された（Table 2）。アートセラピー的な要素が含まれているものを網掛けで示した。これからの図工・美術教育を考えて行く上でアートセラピー的な教育実践を取り入れる必要性を感じた。本来の図工・美術教育の中すべてをアートセラピーにするという考えは筆者にもなく、今までのアプローチの仕方だけではない手法を用いることによつての児童・生徒・教員の双方に気づき・発見がもたらさるかと考えている。

Table 2 これからの図工・美術教育のあり方

記述内容	人数	記述内容	人数
自分らしい自由な表現	18	創造性を高める	2
さまざまな素材の体験や作品に出会う機会をもつ	11	協調性を高める	2
楽しい授業づくり	9	個性をのばす	2
教えるではなく、生徒が工夫、生徒の主体性	7	子どものよさの発見	1
個々に応じた教材・教具の工夫	4	作品作りではなく活動を重視	1
コミュニケーション力を高める	3	心の叫びを受け止める教科	1
教師間の連携	3	視覚支援	1
五感力を育てる	3	教養を深める	1
生活と密着	3		
興味・関心・意欲	3		

③図工・美術教育の指導において困っていること、感じていることを自由記述で回答を得た。

a. 指導内容・指導方法

指導内容・指導方法についての記述で回答を得たものを同様に分類した。KJ法によってできた13のカテゴリーに分類された (Figure 25)。

Figure 25 から「障害の程度や発達段階や興味関心の差が大きい」ことによる教材面、指導面、準備面の問題点が多かった。またそれと絡み「子どもの意志や感覚の引き出し方」「興味・関心や見通しのもてる教材開発」が多くなっている。子どもに応じた指導内容・指導方法を常に考えなおす必要がある。

肢体不自由学校の特徴として「重度の生徒の子どもの主体性」や「教師が手を出しすぎる」などの問題があげられていた。筆者の勤務校で実施されたアンケート調査¹²⁾「活動中に悩んだこと」からにおいても「どんな支援をすれば子どもの力を引き出せるのか」(44人中37名)「子どもではなく支援者の作品になっていないか」(44人中32名)「子どものやりたい気持ちにそえているのか」(44人中20名)となっており問題視されている点である。筆者がアートセラピー的教育実践を特別支援学校において取り組みたいと考えた理由もこのことの要因が大である。今回のアンケート調査でクローズアップされた問題点を考慮しながらアートセラピー的教育実践を図工・美術教育の中の一部に取り入れたいと考える。

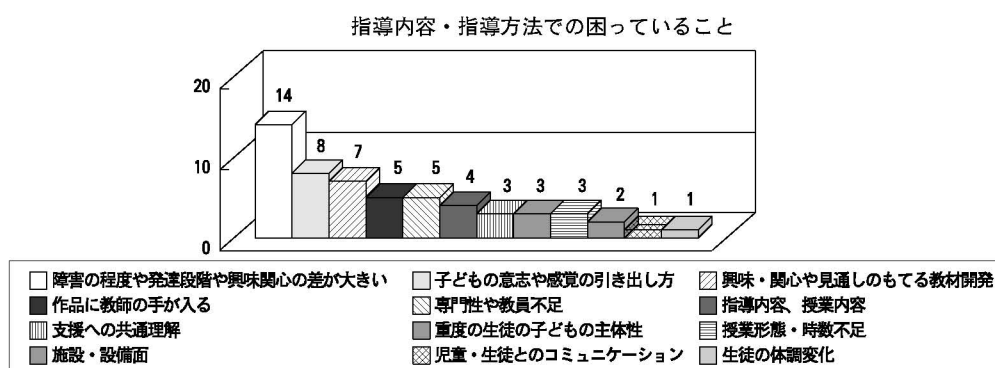


Figure 25 指導内容・指導方法での困り感

b. 目標設定・評価

KJ法によってできた8のカテゴリーに分類された (Figure 26)。

Figure 26 から「個に応じた目標設定」の重要性が伺える。筆者の勤務校で実施されたアンケート調査¹²⁾においても「個々の子どもに応じた目標の設定が難しい」と(44人中11名)が回答していることからさまざまな目標設定をしていくことが現状の授業内容や形態で難しい場合もあると考える。個に対応できる授業形態・教材開発・支援の方法・指導力が問われることになる。また、それに合わせた評価の仕方についても工夫していく必要がある。

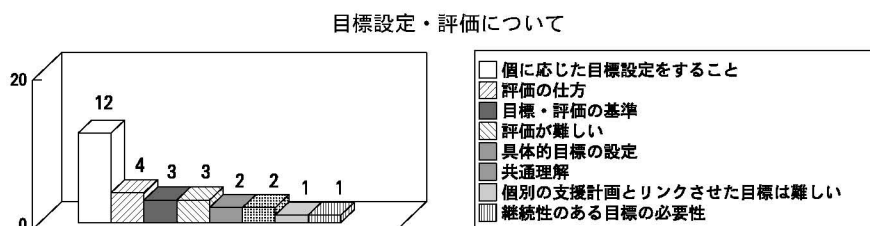


Figure 26 目標設定・評価について

2. 自立活動・教務担当者を対象とした「自立活動における「心理的な安定」の領域に関する指導のあり方について」のアンケート調査－自立活動の指導について－

2008年12月～2009年1月に回収できた14校、68名についての結果の概要と考察をおこなった。回収率は97%であった。アンケート調査の内容は、自立活動における「心理的な安定」に関する指導内容や教材教具の実態把握することを調査するものである。心身の調和的発達の基盤を培うことをねらいとした指導が必要とされ、これに即した指導は、主として自立活動においてや自立活動に関する指導においておこなわれる。そこで自立活動における心理的な安定に関するアンケート調査を実施した。さらに、アートセラピーとの関連性を見出し、アートセラピー的教育実践を自立活動および自立活動に関する指導の中で位置づけることができるかどうかの考察をした。

質問項目「1. 自立活動の授業形態について」「2. 自立活動の内容5区分の必要性」「3. 参考にしてしている指導方法」「4. 心理的な安定に関する具体的な指導内容」「5. 心理的な安定に関する指導において使っている教材教具」「6. 教科や他の領域指導との関連性」の6項目の結果概要と考察を次ぎに述べる。

①自立活動の指導形態について

自立活動の授業形態は、Figure 27より個別を中心とした取り組みをされている学校が大半で82%（N=68）であった。アートセラピー的教育実践は、集団の中でもおこなうことができるが個別を対象としたア트워크を取り組みたい場合、個別（1対1）の時間がもてる自立活動の時間が適しているといえる。

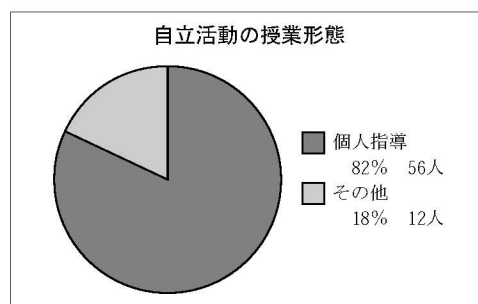


Figure 27 自立活動の授業形態

②自立活動の内容の5区分の指導の必要性

自立活動の内容の5区分で指導の必要性が高いと思われる順に1～5の番号で評定した。担当している児童・生徒の状態によっても違ふし、全て重要であるが、あえて評定してもらうことによってどの区分が必要とされている実態かを把握するためにおこなった。必要性が高いと回答を得た区分についてFigure 28にまとめた（N=67）。なお本調査の後、平成21年3月に告示された新学習指導要領³⁾では、5区分にプラス「人間関係の形成」が加えられ自立活動の内容は6区分とされた。

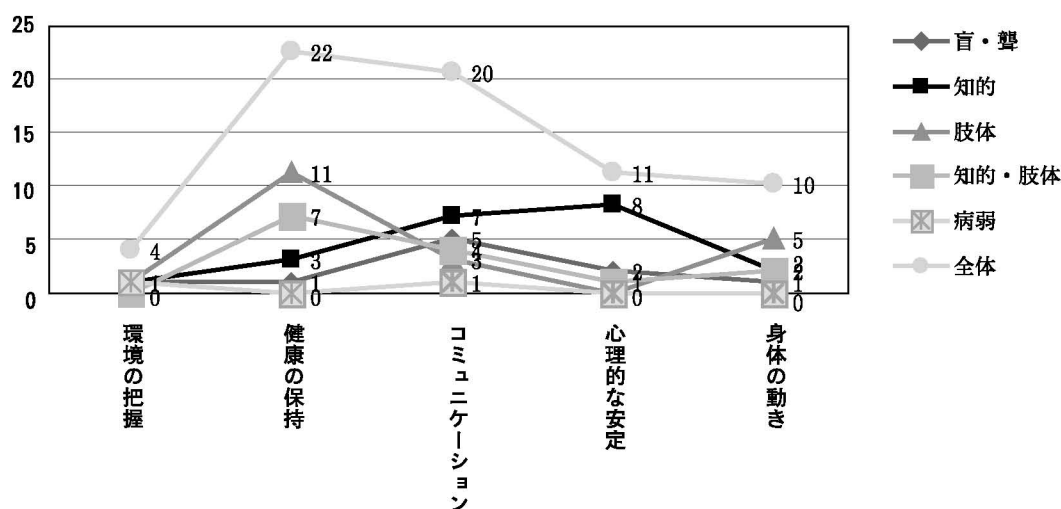


Figure 28 自立活動の内容5区分の必要性

結果として「健康の保持」への重要性が高かった。このことは、肢体不自由学校における重度・重複生徒の増加に伴うものと考えられる。次ぎに高い「コミュニケーション力」は、障害種別に大きな差は見られずどの学校においても必要とされていることがわかった。「心理的な安定」においては、知的障害の学校では高い必要性が求められ他の障害種別校との大きな差が特徴的であった。筆者の勤務校においても自立活動の時間は、「健康の保持」「身体の動き」「コミュニケーション」における指導がおこなわれている。しかし、「心理的な安定」に視点をあてた取り組みも必要と考え自立活動の中で「身体の動き」に関する指導を中心におこなう中で「心理的な安定」と平成21年3月に告示された新学習指導要領⁹⁾で5区分にプラスされた「人間関係の形成」の項目3「自己の理解と行動の調整に関すること」を相互に関連づけた指導もおこなっていきたいと考える。

③どのような指導方法を参考としているか

Table 3 参考している指導方法

参考としている指導方法について自由記述で回答を求めた。Table 3 より専門職との相談が多かった。

専門職との相談 (OT, ST, PT)	11
感覚統合法	7
静的弛緩誘導法	6
動作法	5
PECS	4
ムーブメント	3
ミュージックセラピー、音楽療法	3
TEACCH	3
ABA	2
呼吸指導法	1
AAC	1
書記日本語習得指導法 FM 補聴システム利用法	1
話を聞く	1
散歩、歩行、体力づくり	1

芸術療法の一つとしてあげられる音楽療法については、学校現場において既に参考としている指導方法にあげられているが、アートセラピー、絵画療法については、やはりまだ現場において参考にされていない傾向にある。

新学習指導要領⁹⁾で自己に対する肯定的なイメージを早期から育てることが大切であることから、「自己を肯定的にとらえることができるような指導内容を取り上げること」と新たに規定された。今までの指導内容にとどまらず新たな分野における指導内容の開発もふまえて個々の生徒にあった指導方法を組み合わせることでよりよい指導ができればと考える。

④「心理的な安定」に関する具体的な指導内容

先行研究、高知県立高知江の口養護学校の林 (2004)⁹⁾をもとに「心理的な安定」に関する指導内容について「音楽的な活動」「造形的な活動」「ゲーム的な活動」「運動的な活動」「調理的な活動」「その他」の項目をあげ自由記述で回答を求めた。Table 4 におもな指導内容をまとめた。

Table 4 「心理的な安定」に関する具体的な指導内容

音楽的な活動	教科音楽の指導 (音楽療法は授業ではない)、音と布を使って風を感じる (パラバルーン)、クラシック曲の鑑賞 (CD) 2名、好きな曲を聴いたり歌ったりする6名、楽器あそび (演奏)、曲に合わせて模倣あそびなど7名、リトミック・手遊び4名、ウインドチャイム、フィンガーシンバルなどの音を楽しむ、鍵盤マットの上に乗って音を楽しむ、リラクゼーション、音楽療法・スヌーズレン4名、ミュージックケア、暗室にしてミラーボールの光オルゴールサウンド
造形的な活動	ビーズ通し、スキルタペストリー、パズル作り、花壇にたてる野菜の名札づくり、陶芸 (植木鉢づくり) 粘土細工・木工・手工芸・粘土や糊指絵の具などを使用した感触的な活動5名、描画、造形などでの自己表現3名、のびのびと心を解放できるダイナミックな活動

特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性

ゲーム的な活動	積み箱ゲーム（牛乳パックで作った立方体を重ねていく）、ボールを蹴ったり投げたりする動きを使ったゲーム2名、ルールを通しての自己コントロール、すごろくゲーム2名、ボールサーフィン、手指の訓練にもなるような活動、動物にえさをあげる、型はめ、絵カードを使ったしりとり、自らの動きや意図を引き出す、風船バレーなど
運動的な活動	「からだ」の授業にてくぐる、かがむ、もぐるなど、プール活動3名、山歩き3名、中庭での遊具遊び、トランポリン、ラージボール、エアーマット、キャスターボード、ダンス4名、バランスボール、平均台、マット、ピーナッツボール、バトミントン、遊具を使った運動2名、室内ブランコ、ハンギングチェア、ラージボールを使っての粗大運動2名、自らの動きや意図を引き出す、風船バレー、野球などスポーツ、毎朝運動タイムを設定することによる生活リズムの確保、フィジオロール（ピーナッツ型のボール）での背揺らせなど、静的弛緩誘導法（体さん元気ですか体操、ふれあいリラックス体操、手指の体操など）2名、ムーブメントで使用する教具を使っての体育の授業の実施2名、リラクゼーションタイム、足湯、スキンシップ2名
調理的な活動	調理的な活動13名（におい、香りを感じる、さわった感触、味覚）、達成感を味わう→つくる→味わう、他人に味わってもらおう、見通しをもたせる指導、繰り返し行う
その他	実際に心理的な安定をはかるための自立活動は行っていない。週1時間の自立活動の時間の中でやるべきことが多いので心理的な安定については日常的に人間関係を築いていくこと特に気になることがある時は自立活動の時間というよりは、日常的な対話やスキンシップなどをおこなっている、落ち着ける空間を作る（構造化）、カードなどで内容を伝える（視覚）2名、ルーティンワーク（毎日決まった時間に決まった課題）、社会参加に関すること、対人関係に関すること SST（ソーシャルスキルトレーニング）3名、パソコンを使って意思表示や文書作成を行っている、季節の野菜、花などの栽培2名、校外歩行（自然に接し開放的な気分になることで心理的な安定をはかる）、台車あそび、虫取り（戸外での活動）、砂場遊び、水あそび2名、大型絵本読み聞かせ、パネルシアター、水、湯、スライムを使っての活動、触圧刺激、ベグさしなど作業療法にもとづいた活動、カウンセリング、日常的個々への丁寧な対応、清掃活動、スヌーズレン

⑤「心理的な安定」に関する指導における教材・教具

「心理的な安定」に関する指導における教材・教具をまとめた結果、先行研究よりも音楽療法的なものがたくさんあがってきていると感じた。また、筆者勤務校においてもスヌーズレンを活用しているグループもある。この調査において五感にはたらきかける「聞く」「見る」「触る」「味わう」「匂う」活動を取り入れることによって「心理的な安定」に関する指導をおこなうことが重要であると考えた。今後の自立活動の指導において活用したいと考えている方法や教材・教具についても五感を通して楽しめるものがあげられていた。

⑥教科や他の領域指導と自立活動の指導とをどのように関連づけているか

自立活動の指導と教科や他の領域との関連性をまとめた結果知的障害学校では、「自立活動の授業を設けていない。そのため、各教科や他の領域の中で各教職員が意識して各児童に必要と思われる自立活動的な内容を取り入れて指導をおこなっている。」という特徴があった。その他の学校においても教科や他の領域において自立活動に関する指導をおこなっていた。新学習指導要領（中学部）⁵⁾においても各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習時間及び特別活動の指導と密接な関連を保つように、計画的、組織的に指導がおこなわれるようにするものとするに記載されている。このことから筆者が自立活動の指導内容の「心理的な安定」や「人間関係の形成」に関する指導としてアートセラピー的教育実践をおこなう場合、個々の児童・生徒の実態に合わせて自立活動および各教科のどこに位置づけてもよいと考えた。今回は、特別支援学校 A 校（知的障害）においては生活単元学習の指導における実践、特別支援学校 B 校（肢体不自由）においては教科（家庭科）における実践をおこなった。

3. 2種類のアンケート調査の結果と考察

二つのアンケートによる実態調査により、「アートセラピー」という言葉は知られていないが図工・美術の授業においてアートセラピー的な活動はすでに取り入れられてきているし、アートセラピー的な考え方のもと指導がおこなわれているものもあることがわかった。今回の実践は、図工・美術の教科だけでなく自立活動の指導内容の「心理的な安定」や「人間関係の形成」に関する指導として他教科におけるアートセラピー的教育実践をおこない、さまざまな視点からの可能性を探りたいと考える。

IV. 研究2. アートセラピー的教育実践における結果と考察

1. A 特別支援学校（知的障害）中学部1年生5名（男子3名、女子2名）のアートセラピー的教育実践

「パラシュートをつくろう」（集団描画・コラージュ）の題目名でアートセラピー的教育実践を実施した。

(1) 授業の選定及び概要

事前体験実習における生活単元学習での調理実習の様子より、友だちと協力して作ることや、任された作業をやり遂げる力が見受けられたので、友だちと協力して制作をする活動を取り入れることによってより一層なかまと一緒に制作する喜びを感じたり「表現」することの楽しさを感じたりできればと思い、集団描画・コラージュを活動に取り入れたいと考えた。本時の「ねらい」を次のようにした。

Table 5 アートセラピー的教育実践のねらい

授業実施者 支援者	<ul style="list-style-type: none"> アートセラピーで使われる素材の一つを取り入れて感覚を刺激する。 活動を通して生徒の自然な身体の動きや興味・関心といった心の動きを知る。 作品から生徒一人ひとりの好みの違いを形や色を通して気づく。
生徒	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな切り抜きを貼ったり、自由に描いたりすることを通して「表現」することを楽しむ。 制作、鑑賞活動を通して「表現」することで心身をリラックスする。 今までにない作品鑑賞の方法を通して自尊感情を高める。 友だちと協力して制作する。

(2) 活動プログラムの内容

Table 6に「パラシュートをつくろう」（集団描画・コラージュ）に活動案をまとめた。

Table 6 「パラシュートをつくろう」（集団描画・コラージュ）活動案

場面	生徒の活動	ねらいと留意点
1. 活動の説明 (10分)	本時の活動の内容を知る ・クラスみんなで協力して大きなビニールシート（ビニール袋を貼り合わせて作ったもの）に事前に用意した好きな切り抜きを貼ったり、色画用紙をちぎって貼ったり、自由にマジックで描いたりすることを知る。 ・みんなで作った作品をムーブメントパラシュートのようにして鑑賞（遊ぶ）ことを知る。	<ul style="list-style-type: none"> わかりやすいように画用紙に説明を書いたものを掲示する。
2. 協働制作 (35分)	集団描画・コラージュ制作活動をおこなう ・好きな場所に自由に描く（太マジックなど）。 ・好きな場所に切り抜きや色画用紙などを貼る。 ・友だちや支援者と協力して制作する。	<ul style="list-style-type: none"> 制作段階では、生徒の得意な活動をいかす。描くことだけに集中する生徒、貼ることだけに集中する生徒がいてもよい（生徒の得意な方法に合わせる）。

特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性

片付け (5分)	(スペースの交渉や材料のやりとりをしたり、協力してキラキラテープをはったりする)。 ・次の活動をする準備をする。	・時間の関係上画面いっぱい貼ったり、描ききれなかったりする場合もあると思うが、時間で区切り次の活動に入る。
3. 作品を楽しむ (鑑賞) (20分)	ムーブメントパラシュートのようにして作品を鑑賞する ・作品の下に入り、作品をひらひら動かしてもらったり、上げ下げしたり、ゆっくりまわしてもらったりして作品の色や形を楽しむ。	・全員が入れない場合は交代しておこなう。 ・生徒の表情などを観察するために支援者も1名は、入る。
4. シェアリング (10分)	本時の活動を振り返る ・感想を出し合う (言葉、ジェスチャー、表情など)。 ・振り返りシートを先生と話し合い記入する。	・記入が難しい場合は支援者が記入する。

(3) 自己評価 (活動の感想) - 生徒のふり返しシートによる分析と考察 -

Table 7 に生徒のふり返しシートをまとめた (数字は該当する生徒数を示す)。Table 7 より、生徒はおおむね活動に楽しさを感じ、リラックスができたと感じたといえるが、どの質問に対しても「はい」と答えてしまう生徒や、どれくらい楽しかったのかが判断できにくい生徒もいる。

「今日の活動で一番楽しかった活動は何ですか」の質問に対しては、貼る活動に2名、描く活動に1名、パラシュート (作品鑑賞) の活動に2名という結果となった。学級担任から実施する前は、パラシュート (作品鑑賞) の活動に楽しさを感じるのではないかと予想されていたが、貼ったり描いたりする活動にも楽しさを感じられたようである。

Table 7 生徒のふり返しシートのまとめ (生徒5名)

質問項目	すごく	まあまあ	あまり	ぜんぜん
1. 貼ったり、描いたりして楽しかった。	5	0	0	0
2. 友だちと協力して、作品を作ることができた。	3	2	0	0
3. 大きな作品が、できあがって嬉しかった。	5	0	0	0
4. 作品を使ったパラシュート (鑑賞遊び) が楽しかった。	5	0	0	0
5. 今日の活動でからだがりリラックスできた。	4	1	0	0
6. また今度このような活動がしたい。	5	0	0	0

(4) 他者評定法

①教育実践者 (筆者) および学級担任による生徒の行動観察

今回の実践で筆者が主に担当した A 児についての分析をおこなった。

学級担任が記録した記録用紙、教育実践者 (筆者) が記録した記録用紙およびビデオ撮影・写真記録からみた A 児の様子と気づいたことについて Table 8 にまとめた。

Table 8 A 児の様子と気づいたこと

場 面	どのような様子でしたか。また、新しい発見は？		
	学級担任	教育実践者 (筆者)	観察 (ビデオ・写真) 記録から
生徒が最初におこなった活動 (選んだ図柄 OR 描いたもの)	伊勢エビのコラージュを選択してかごに入れ、次には電車、恐竜のシールを選んだ。	伊勢エビの切り抜きを真っ先に選んだが、シールの箱のシールを一枚一枚見て電車のシールを選び、その中の信号から貼っていった。	支援者がルールの説明で伊勢エビを例に出したので伊勢エビが印象に残っていたのかもしれない。友だちが選び終わってもゆっくりシールを選び、マイペースに行動。シートの四つ角の隅の方に座り、電車のシールを横並びに丁寧に貼っていった。

制作を通して	シールの図柄が気に入ったのか、何枚ものシリーズになっている恐竜のシールに熱中していた。	自分の好きな物をたくさんの中から選び活動ができた。ペースも自分のペースでおこなっていた。	自分からしゃべり出すことはなく、もくもくとシールを貼る。1枚のシートのシールを貼り終わると集中して疲れるのか寝転がる姿が見られたが「おやすみ」の担任からの言葉に「寝ないよー」とすぐ起きあがりシールの箱に直行。1つのシートを1枚ずつ前に取りに行ってから制作をしていた。
好きな物を貼っている場面	小さいシールであったので背を丸め指先の作業に集中していた。	1つ1つ丁寧にこだわりながら貼っていた。	1つ貼っては指で押さえ確認をしてまた1つ横に並べて貼っていた。1シートごとにかためて貼っていた。
鑑賞 パラシュートの中での活動	中に寝ころんだ体勢で上下するビニールを両手で触ったり、声を上げたりして興奮して楽しむ姿がみられた。	のびのび寝転がってリラックスしていた。自分の作品を見つけて触ろうとしたりしながら鑑賞していた。ビニールが体からずれると自らビニールをかぶせていた。	大の字に寝ころんで、貼ってあるものが落ちてきても気にせずにいる。ビニールを激しく揺すられると自分も手で作品を「ばしゃばしゃ」とたたき感触を楽しむ。人一倍中に入っていた。ビニールが顔にかぶっても嫌がらず、自らビニールを頭にひっつけていた。中で十分リラックスしていた。
シェアリング ふり返りの場面	支援者の説明より前に全ての質問に答えて○をつけていた。(簡単な漢字を読める。選択肢のまあまあという意味が理解できていないかもしれない)	恐竜の卵のシールを貼ったことがよかったと発表する。ふり返りシートは他の友だちがゆっくり答えている間に全部仕上げてしまう。	自分でふり返りシートを読んで記入していた。友だちにわかるように質問項目を読んでくれていた。一番楽しかった活動は「恐竜のシール」と答える。

②生徒の一番楽しめていた活動

記録用紙より生徒が一番楽しめていたと思う活動として学級担任は、鑑賞のパラシュートの中での活動をあげていた(資料1, Figure 29)。A児は、恐竜のシールのシリーズを貼ったことが楽しかったようである。

③生徒と協働作業した感想

生徒と協働作業した感想を学級担任に記述してもらったところ、次のような記述があった。

「見本を真似て描画や切り貼りの活動をするが多かったり、自由に選ぶことが意外に難しかったりすることがあるので、『好きにしていよ』という指示からどういう行動がみられるかなと思ったが、今回の主旨を理解できていたと思う。興味を持つ図や柄、素材や動きをうかがい知ることができる新しい機会が子どもを多面的に捉えることになると思った。」とあった。

授業の中という枠内の中での自由な選択場面は、何気なく選ぶ1枚にも意味があり、普段の生活から予期せぬ物を選んだり、こだわりがあったりする場合がある。今回はこの1回のみ活動であったが、続けてすることにより気づくことは多いと感じた。

普段の休憩時間に自由帳にお絵かきをよくしている生徒だったので絵を描く方の活動もするかもしれないと思っていたが、今回貼る素材の提示の時間も長かったことや素材を入れる箱などの魅力もあり貼る活動に集中したのかもしれない。

(5) アートセラピー的教育実践の本時の問題点課題点の分析と考察

①本時の教育実践評価からの分析と考察

学級担任2名による本時の教育実践評価をTable 9にまとめた(数字は該当する評価をした教師数を示す)。Table 9より1回の教育実践の活動中だけでは、生徒に対して新しい発見を見つけることはやはり難しいようである。ビデオや写真などの観察記録から見えてくる部分も多い。また、集団での実践の場合、個々の活動の様子を全て見ることは不可能なので、ビデオを複数台

特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性

設置して分析する必要があったと考える。

今回の実践を通して、思い通りのびのび表現したい生徒、自分の世界で小さい枠の中で楽しみたい生徒、素材の感触を楽しみたい生徒、人とのやりとりを通して表現を楽しみたい生徒などさまざまで、特徴がはっきりわかったので個人セッションをおこなうとき、その特徴を活かした活動内容を考えることができると感じた。今回の活動から次に活かすという活動が1回という実践ではできないので残念ではあったが、子どもたちは、1回の活動の中にも十分自分の個性を活かした表現方法で精一杯表現してくれていることがわかった。

Table 9 アートセラピー的教育実践評価表 (学級担任 2名)

質問項目	とても	それなりに	あまり	まったく
今日のアートセラピー的教育実践は、生徒が表現することを楽しむ内容でしたか。	0	2	0	0
制作や鑑賞活動を通して「表現」することで生徒がからだを解放（リラックス）できていましたか。	0	1	1	0
今日のアートセラピー的教育実践で生徒に対して何か新しい発見がありましたか。	0	0	2	0
今日のアートセラピー的教育実践をあなたはどのように評価しますか。	0	2	0	0
今後、またこのような活動（アートセラピー）を取り入れてみたい。	1	1	0	0
今日の活動を通してアートセラピーに対して興味・関心が深まりましたか。	0	2	0	0

②今後のアートセラピー的な教育実践で改善すべき点

Table 10 にもあるように制作材料として鑑賞のとき、光を楽しもうとビニール素材にしたことで、切り抜きの裏がすけてしまうことになったため、台紙に色画用紙をつけたので重みがかでてしまい、ゆらすことで作品がはずれてしまった。太めの両面テープを使うか、台紙を薄い素材に改善する必要がある。生徒が必要以上にゆらすことを楽しんでしまったこともあると考えるが、そのことを注意するより、素材を変える必要があると感じた。また、生徒にしっかり貼り付けるように指示していなかったことも理由としてあげられる。

スペースとしてはやはり教室では狭い。今回は、場所が教室しかなかったので教室でおこなったが、もう少し広いスペースならビニールももっと大きくできるし、パラシュート（作品鑑賞）活動もダイナミックにできると考える。

今回は、切り抜きの用意の仕方をコラージュ・ボックス方式で用意した。なるべく種類を豊富にして感触の違うものもいれて選ぶ方式をとった。たくさんの種類を用意したことにより、制作を始める前から生徒が材料の所に集まり興味関心を持ってくれたようであったが、もう少し同じ種類の物をたくさん用意するとよかったと感じた。

Table 10 改善すべき点について (学級担任 2名)

	場所の居心地のよさ	日 時	制作材料	テ ー マ	運営方法	そ の 他
アートセラピー的な教育実践で改善すべき点はどこにあるか	0	0	1	0	1	時間とスペースの自由度

(6) 学級担任による意見、提案など

アートセラピー的教育実践評価表の中で学級担任による自由記述の欄を作った。そこに記述され

た内容は Table 11 に示す通りである。

しっかりと明確な説明の時間をとってきちんとする必要がある。大きい作品制作に開放感が高まる生徒もいるので時には、大きい作品を制作する機会を作ることも大切であるとする。

本来の美術の造形活動のなかにもアートセラピー的な活動は含まれているので、その違いを明確にして伝えることを大切にしたい。また、アートセラピー的な教育実践の基本的な考え方である「制作している段階での生徒の動きや発語に注目する」「生徒と支援者との協働作業であり、生徒が安心して自分を表現できる場をつくること」「アート制作を通じて、自己成長や変容を達するための援助活動なので双方が主体的であること」をどのように共通理解していくかが課題である。

Table 11 意見・提案（学級担任1名）

<p>今日のアートセラピー的教育実践についてあなたのご意見（改善点、新しい提案など）をお聞かせください。</p>	<p>「アートセラピー」の定義や概念がよく理解できていないのですが、セラピーということは、治癒を目的としている印象がある。教育の現場は治療ではないのではないのでしょうか。今回の活動のような活動をセラピーというなら、造形活動がもつ効果の最大限の活用は日頃からしているつもり。本来の形なりがあると思うが、いまひとつその違いがわからなかった。</p>
--	--

(7) 生徒へのフィードバック

今回は、1回という活動であったが、どんな作品をどのように取り組んで作ったのか明確にし、活動を通して自尊感情を高めて欲しいという願いもあり、生徒一人ひとりに、その活動の素晴らしかった点を表彰し、写真をアート記録シートにまとめて返した。

2. B 特別支援学校（肢体不自由）中学部 女子1名のアートセラピー的教育実践の結果と考察

単元名 家族と家庭生活

小題材名 「中学生になるまで」

授業名 「ライフヒストリー」～わたしの成長と家族や周囲の人々

(1) 授業の選定及び概要

家庭科の学習で「家族と家庭生活」という単元がある。その中の小題材として「中学生になるまで」をふり返る活動がある。通常の授業では、写真などを使って思い出したことを言語化する活動にとどまるが、写真などの情報は限られている場合が多い。記憶に残っている、さまざまな出来事を「写真」「雑誌の切り抜き」「色」をヒントに過ごしてきた時間や感じた想いをたどることで今まで意識していなかったことに気づいたり、想いもしていなかった出来事が引き出されたりできてより深い自己理解への手がかりになると考えた。

また、「色」のイメージは人それぞれ感じ方が違う。「色のライフヒストリー」をつくることで何故その色が好きなのか、嫌いなのかを知る手がかりになったり、美術などで無意識に使われる色の意味を理解したりする手がかりになったりすると考えた。「9分割統合絵画法」は、これからのさまざまな場面において思考をまとめる活動として用いやすいと考えた。

注意点として本人がつらいとき、嫌なときは、無理にそのときのことをふり返らず、本人の選んだときのことのみをふり返るように設定した。今回のアートセラピー的教育実践の「ねらい」を次のようにした。

特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性

Table 12 アートセラピー的教育実践のねらい

授業実施者	<ul style="list-style-type: none"> ・アートセラピーで使われる素材「コラージュ」・「色」に対するイメージ・9分割統合絵画法（思考をまとめるための技法）を取り入れて自分の成長をふり返りやすいようにする。 ・活動を通してB児の成長を共有する。 ・作品からB児の「コラージュ」の特徴や「色」に対するイメージを分析して今後の支援方法に役立てる。
B児	<ul style="list-style-type: none"> ・「写真」・「雑誌の切り抜き」・「色」・「9分割統合絵画」をヒントに過ごしてきた時間や感じた想いをたどることで今まで意識していなかったことに気づいたり、想いもしていなかった出来事が引き出されたりしてより深い自己理解への手がかりとする。 ・自分の成長や生活は、家族や身近な人々に支えられてきたことに気づく。

(2) 活動プログラムの内容（40分授業×3）

Table 13に「ライフヒストリー」～わたしの成長と家族や周囲の人々の活動案をまとめた。

Table 13 「ライフヒストリー」～わたしの成長と家族や周囲の人々

実施日 技法	場 面	生 徒 の 活 動	ねらいと留意点
「第1回目 コラージュ」	1. 活動の説明 (5分)	本時の活動の内容を知る 自分の成長をふり返る ・誕生から乳幼児期、幼児期、児童期までを写真や雑誌の切り抜きを使って（コラージュ） 振り返ることを知る。	・わかりやすいように例を示す。
	2. 協働制作 (25分)	コラージュの制作 ① 台紙を選ぶ ② 誕生から乳幼児期、幼児期、児童期の中で特に印象に残っていることを切り抜き、広告、雑誌から選び台紙に貼る。	・次回の授業との関連を見るため色の画用紙を用意する。 ・切り抜き「食べ物」「おもちゃ」「生活用品」「アクセサリ」「文房具」、広告、雑誌を用意して選びやすいようにする。
	3. 鑑賞 作品を楽しむ シェアリング (10分)	自分の作った作品をふり返る ・振り返った成長を共有する。 ・どんなことが自分をつくってきたかを気づく。 ふり返りシートの記入	・振り返りやすいように質問する。 ・振り返ったことを一つひとつ共有していく。
「第2回目 色のライフヒストリー」	1. 活動の説明 (5分)	本時の活動の内容を知る 自分の成長をふり返る ・誕生から乳幼児期、幼児期、児童期までを色のカードを使って（色のライフヒストリー） 振り返ることを知る。	・わかりやすいように自分が制作した色のライフヒストリーを例示する。 ・色数の多い「新配色カード199a」日本色研事業株式会社を使用する。
	2. 協働制作 (25分)	色のライフヒストリーの制作 ① 色のイメージをまとめる 「赤」「橙」「黄」「緑」「青」「紫」「ピンク」「無彩色」をイメージする言葉と出来事と思いをワークシートにまとめる。 ② 家族を色に置き換えてふり返る 幼児期の家族の色と現在の家族の色をから選びワークシートに貼る。	・自分の思い出しやすい色から取り掛かる。 どうしてもふり返りをしたくない色については無理に思い出させない。 ・選びやすい所から始める。
	3. 鑑賞 作品を楽しむ シェアリング (10分)	自分の作ったワークシートをふり返る ・振り返った成長を共有する。 ・どんなことが自分をつくってきたかを気づく。 ふり返りシートの記入	・色よっての感情の違いに気づかせる。 ・今回制作したい色のイメージは今感じたもので時間を経て制作した色のライフヒストリーとは異なることを伝える。いつまでも一緒になるとは限らない。

「9分割統合絵画法」 第3回目	1. 活動の説明 (5分)	本時の活動の内容を知る 自分の成長をふり返る ・誕生から乳幼児期、幼児期、児童期までを「9分割統合絵画法」でふり返ることを知る。	・わかりやすいように自分が制作した「9分割統合絵画」を例示する。
	2. 協働制作 (25分)	① 自分の成長をふり返る ・自分の成長の中で特に印象に残っていることを9つに分割された画用紙に写真、言葉、絵、雑誌の切り抜き、色など好きな方法でまとめる。	・第1回目の授業時に用意してきた本生徒の乳幼児期の思い出の品を写真に撮ったもの、乳幼児期の写真をカラー印刷したものを用意する。 ・2回目、3回目で準備したものを今回も用意する。
	3. 鑑賞 作品を楽しむ シェアリング (10分)	① 自分の作った作品をふり返る ・振り返った成長を共有する。 ・どんなことが自分をつくってきたか気づく。 ② ふり返りシートの記入 ・本時だけでなく3回の活動を通して気づいたことを書く。 ・自分がどのように成長してきたかを理解する。 ・自分がどのような経験をし、どのような人びととかかわって成長してきたかを知る。	・思い出し方の違いなどをしっかりとふり返っていく。 ・3回おこなった活動で自分にあっていると思う方法についてシェアリングする。

(3) 自己評価（活動の感想）

①生徒のふり返りシート

どのアートセラピーの手法も楽しんでいる様子で制作しており、自分への気づきも持てたようである。B児のふり返りシートを Table 14 にまとめた。

Table 14 B児ふり返りシートのまとめ

	質問項目	すごく	まあまあ	あまり	ぜんぜん
「コラージュ」 第1回目	1. 雑誌の切り抜きや写真を貼って楽しかった。	○			
	2. 自分の成長をふり返ることができた。	○			
	3. できあがった作品から自分への気づきがあった。	○			
	4. また今度このような活動がしたい。	○			
「色のライフストーリー」 第2回目	1. 色からイメージする言葉と出来事と思い出から自分の成長をふり返ることができた。	○			
	2. 家族を色に置き換えてみることで今までに気づけなかった色に対する見方ができた。		○		
	3. できあがった作品から自分への気づきがあった。	○			
	4. また今度このような活動がしたい。	○			
「9分割統合絵画法」 第3回目	1. 9つの枠を作ることで自分の成長をふり返りやすかった。	○			
	2. 今回の制作を通して今までに気づけなかった自分の成長に気づいた。	○			
	3. 9つの枠に整理することで自分の成長をまとめやすかった。	○			
	4. できあがった作品から自分の成長は家族や身近な人に支えられてきたことに気づいた。	○			
	5. また今度このような活動がしたい。	○			

②生徒の感想

「自分の作品にタイトルをつけるとしたら、どのようなタイトルになりますか。」という質問に対して、コラージュの作品では、「小さな○○ワールド☆☆☆」9分割統合絵画法では、「自分

ストーリー（●^o^●）」というタイトルをつけた。

今日の感想を書く自由記述の欄に、第1回目「コラージュ」では、「幼い頃の自分に会えた気分で楽しかった。これからやっていく中でもっとたくさんの過去の自分に会えたらよいなあ、と思います。」第2回目「色のライフヒストリー」では、「ふり返っていろいろな事を思い出してよかった。」第3回目「9分割統合絵画法」では、「はずかしかった(*^^)v」と書かれていた。

シェアリングの中で3回の活動で「色のライフヒストリー」が自分にとっては一番やりやすかったと回答した。「色」を通して自分をふり返ることが1番楽しくできたようである。

(4) 行動の観察と考察

①教育実践者（筆者）による生徒の行動観察

B児についての分析をおこなった。教育実践者（筆者）が記録した記録用紙をもとにB児の様子と気づいたことについてTable 15にまとめた。

Table 15 B児ふり返りシートのまとめ

	場 面	B 児 の 様 子	B 児 対 する 新 し い 気 づ き
「コラージュ」 第1回目	B児が最初おこなった活動 (選んだ図柄、貼った場所)	箱ティッシュのチラシを見ていたずらをしたことを思い出す。キッチンペーパーでもいたずらしたことを思い出すが箱ティッシュの方を貼りたいたと選び広告から切って左1番上に貼りつける。	おもちゃなどに着目するかと思っていたが生活用品からの遊び(イタズラ)だったので意外だった。ティッシュ箱のいたずらは、父といるときの出来事。
	制作活動を通して	一つひとつ切り抜きを選んで、思い出したことを話し当時の様子をふり返っていた。	考え込んで作業が進まないということがなく次から次へと思い出しいろいろなエピソードを語ってくれたので普段にはない面を感じ取ることができた。
	シェアリング ふりかえりの場面	<ul style="list-style-type: none"> ・食べ物のお好みが変わったこと。 ・おもちゃの人形を口の中に入れて出せなくなりおばあちゃんに出してもらったこと。 ・コナンの漫画の切り抜きを選び3枚も貼った理由として会話が途中で終わるのが嫌だから、言葉を最後まで言ってくれないと不安になると述べた。 ・兄に買ってもらったトランプの話をする。 ・幼稚園の時目の手術をしたこと。眼鏡を小4までこわいと思っていたこと。 	コナンの漫画の会話が途中で終わるのが嫌、不安という点から本生徒への接し方で話を途中で終わらず言葉を最後まで話すことが大切であることがわかった。 眼鏡を怖いと思っていた理由は本生徒も「わからない」ということであったが、怖いものも克服できているという点において成長が感じられた。
	B児が気に入っている場所	「オムライス」…お父さんが作るオムライスがとともおいしくてそのオムライスに似ているからととも嬉しそうであった。 「コナンの口のあき方」…「普段こんな穏やかな口の開け方をしない。いつもは事件に悩んでいることが多い。」ことを理由にあげた。	あまり意識して用意していなかった漫画の切り抜きからの発見が多かった。普段は、誰にでも話が弾む明るい活発な様子であるが、コナンの口のあき方など細部にも注意がむけられている点や表情など人の気持ちに心を遣う繊細な面を感じ取ることができた。
	ふり返りシート 記入場面	真剣な表情で記入していた。	「もっとたくさんの過去の自分に会えたら良いなと思います」という感想から過去と向き合っている本生徒の気持ちがわかった。
「色のライフヒストリー」 第2回目	B児が最初におこなった活動	赤から思い出しながら書いた。	思い出しやすい色からでよいと話したが、この順番でよいとワークシートの順番に進めていた。色に対する抵抗がないことがわかった。
	制作活動を通して	<ul style="list-style-type: none"> ・一つ一つスムーズに思い出していた。 ・ネガティブなものも思い出して話をしてくれた。 ・配色カードを用いて具体的に思い出した色にまでさかのぼって選びだした。 	紫色は、思い出すのに時間がかかっていた。細かい部分まで覚えていることにびっくりした。

	ポジティブな色	「ピンク」と話した。 「装具をつけていたが靴を初めて買ってもらったことがすごく嬉しかったから」と理由を話す。	今回のポジティブな色の傾向は、パステル調であった。
	ネガティブな色	緑（濃い）と話した。 「小学校の時同じクラスの男子にイタズラで服の中にカエルを入れられてとても嫌だったから」と話す。	ネガティブなことも話すことができる。
	家族を色に置き換える活動	色に置き換えるのが難しくないかと尋ねたところ「ぜんぜん難しくない」と回答する。次から次とすぐに色を選んで制作をしていた。	現在の自分の色を「水色」と言い理由として「でしゃばりすぎるところや言葉遣いを直したい」と話していた。ワークシートには「今の自分はいろんな経験を積んだ分だけ色がついた」と書かれており自分の長所、短所をしっかりと見つけていて前向きな姿勢が感じ取れた。
	シェアリング ふりかえりの場面	色に対しての記憶が鮮明ではっきりしている様子。	色を通して思い出すこともたくさんあり、「色」とのかかわりは、本児にとって思い出しやすい素材であることがわかった。
「9分割統合絵画法」 第3回目	生徒が最初に行った活動	お兄ちゃんからもらったトランプの写真のコピーを貼った。	お兄ちゃんとの思い出を大切にしていること。トランプを今でも大事にケースに入れて保管している。
	制作活動をとおして	今までに気づかなかった思い出も思い出してきて用紙に書き込んでいた。	幼稚園の時のことが多いという印象。文字の後に顔のイラストをいれて表情をつけていること。
	シェアリング ふりかえりの場面	一つひとつ思い出しながら書いて当時の様子を話してくれた。	手術2回の時の様子が詳しくわかった。
	ふり返りシート 記入場面	感想のところに「はずかしかった（*^^）v」と書いた。	今までにはそのような様子がなかったのです。そのような気持ちであったことをこのとき初めて気がついた。

②生徒と協働作業した感想

普段から本生徒といろいろな話をしてきたが今回の授業を通して本生徒に対して気づいていなかったこともたくさんあることがわかった。鮮明に記憶していることも多いことやコナンの口のあき方など細部にも注意がむけられている点、表情など人の気持ちに心を気遣う繊細な面を感じ取ることができた。また、9分割統合絵画法では、初めて取り組んだことを書くことが多く、初めて取り組んだことが特に印象に残りポジティブなイメージとしてつながっているように感じた。

(5) 作品からの気づき

作品からの気づきを Table 16 にまとめた。作品は、資料 1 に Figure 30.31.32 として添付した。作品からの気づきはスーパービジョンを受け参考にした。

Table 16 作品からの気づき

「1コーラージュ」 第1回目	統合性	にぎやかな感じで漫画が入られ会話があるので動的な感じがする。また、温かい印象を受ける。中心に明るい笑顔のイラストがあり本生徒の理想像が表れたのかもしれない。
	台紙	台紙は、白色ではなく水色を選んだ。水色が以前に幸運の色と言われたことがあり好きだから選んだと話した。
	空間配置	画面の構成で作品が上に偏っているのが内斜視の影響で画用紙全体が見えていないためであった場合は、作品の見方も変わるので本人に確認が必要である。台紙を離して見せて「ここがあいているけど何か貼りたい？」と聞いてもいいし、描きこむペンなどを用意してもよい。左上が4枚と最も多い特徴がある。一般的には左側が過去、右側が現在を表すといわれている。

特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性

	テーマ	人との関わりは父親との関係のあるものがティッシュとオムライスで2枚ある。情緒的な体験としてのもの、ティッシュでイタズラした時「どんな気持ちだったか、父親の様子など」聞くことでより本生徒をより理解できる。ダイエット中のためか食べ物が3枚と全体的に考えると多い。好きなものを6枚貼るといった特徴があった。作品の中に自分自身を表現する「自己像」の切り抜きがある場合があるが、メガネは本生徒の身体的特徴を表しているし、なくてはならない大事なものという意味もある。
	切り方 貼り方 色彩	重ねて貼ってある左側と整列して貼ってある右側と対照的であった。左側は、過去のものとなっていて右側は、場所の取り方も大きいことから今、大事と思っている価値基準がある。重ね張りは、整理されていない雑然としている心の状態の時に表れやすい。
「色の ライフ ヒストリー」	統合性 色彩	鮮やかな感じを受ける。ポジティブな色合いにパステル調を選び、ネガティブな色合いは、ダークを選んでいる。無彩色にネガティブなイメージがない。紫色で思い出すのに時間が少しかかっても思い出して貼っているところや上から順番に思い出しているところなど几帳面な性格が窺える。また、「～すべき」という気持ちが強いように感じる。
	家族の色	現在の家族の色は、白髪が増えたというより本生徒が自立という意識が強く自分自身がしっかりしていこうというあらわれであるように思う。現在の家族の色は、色味があり安定しているように感じる。色のライフヒストリーも含めて色のイメージがすぐに浮かんでくることからイメージ療法を楽しんでできる生徒であると思う。今後、図形家族画を取り入れると家族関係を理解しやすい。
「9 分割 統合 絵画法」	統合性	文字が多い。感想に3回目だけ「はずかしかった(*^*)」と書いたのは、絵は、ぱっと見ただけでは何かよくわからないけど文字で書くとはっきりわかるのとははずかしかったのかもしれない。シェアリングをしっかりとするとよい。「はずかしい」という気持ちを出せたことが素晴らしいことである。初めての思い出が4つと多く、初めておこなったことが印象に残っているようである。音に関するものが4つと多く、「音」は感情が流れるという意味をもっている。
	学年	幼稚園の思い出が4つと多く、しっかりと覚えている。3つのワークを通してあまり出てきていない学年、小6なども含めなせだろうと考えてみるのが大事。防衛していて出ない場合もあるかもしれない。
	家族	兄からもらったトランプを大事にとっていることから兄へ慕う気持ちが強い。

(6) アートセラピー的教育実践の成果と課題の分析と考察

①本教育実践の成果と課題

第1回目「コラージュ」においては、コラージュ・ボックス方式とマガジン・ピクチャー・コラージュ方式を併用しておこなった。コラージュ・ボックス方式だけでは気づけなかったものがマガジン・ピクチャー・コラージュ方式（雑誌）から本生徒が選ぶことで思いもしない気づきがあった。また事前に、思い出に残っているおもちゃや写真も用意してもらった。生徒が持っているものは自分の心の内を見せることなので、持ってきたものだけで十分な語りができる。作品に残らない部分もしっかり語るということを大事にしていきたい。

今回は、せっかくの写真を切りたくないということでおもちゃと一緒に一枚ずつ写真に撮り、3回目の活動に使うことになった。用意した雑誌で思いもしない切り抜きを本生徒が選び、筆者が予測もしていなかった展開があったのでコラージュ・ボックス方式だけではなく、雑誌は用意する方がよいと感じた。もしくは、生徒に雑誌を用意してもらってまた違った展開があったかもしれない。授業時間だけでは限られた時間しかないから本生徒が望むのであれば休憩時間などに時間を作って制作するとまた新たな発見につながると考える。

第2回目「色のライフヒストリー」においては、色を通して自分を振り返る活動が本生徒にとって一番取り組みやすかったということで、一つの手法に限定しない利点があった。今回は、赤、橙、黄というように色を決めてする手法であったが思い出せる年齢から「例えば4歳～」生徒に選んでもらうという手法もおこなうとより色の自分史が明確になったのではないかと考える。また、教育実践者（筆者）の色のライフヒストリーも見せたが、複数（グループ）で活動をおこないシェアリングすることで人との違いを感じたり自分への気づきが明確になったりするのでグループでおこなえる機会をもてるとよい。

第3回「9分割統合絵画法」では、最初「9つもある」と多いというイメージがあったようであるが取り組むうちに思い出されてくることがあったようである。

今回の授業で自分自身の幼児の時の様子をふり返ったことで幼児が喜びそうなもの考える気持ちをもつことができ大変役立ったとB児から聞き、次の単元へのつながりができたと感じた。

②本生徒への今後の支援のあり方と本生徒へのフィールドバック

内面には、繊細な気持ちがあり自分をどのように受け止めるか未消化の部分もある様子なので今後も生徒との十分な話し合いの場をもち、しっかりと向き合って話をするを大事にしたい。また、他教科との連携として本生徒の色の色彩感覚の傾向や色彩嗜好のルーツ、家族の色のイメージの傾向を知ることができたので、美術科で取り組む作品を通して本生徒の理解を教育実践者が深めて本生徒に適切な支援をしていくことで本生徒が自己理解を深めていけるように支援していきたい。さらに、本生徒は、意欲的で初めてなことにチャレンジする姿がみられる。今回の教育実践からも「初めて」がポジティブな印象として残っていることが多かった。なるべくいろいろな経験の場を設定していきたいと考える。今回の実践では、過去の振り返りをおこなったので「これからどうしていきたいのか、なりたい自分を考える」未来の自分を見つめるワークを設定し、今の自己理解を深める活動を取り入れていきたい。

作品は、系列的にみやすいようにアルバム化して作品から感じたこと、本生徒の成長を感じた部分などを伝えて返した。

(7) 今後のアートセラピー的な教育実践で改善すべき点

いくつかある手法の中でどの手法をおこなうかを選定することが難しい。本生徒は、3種類の手法を混乱することなく取り組んでくれたのでそれぞれの手法での違いや本生徒の好む手法が特定できてよい面が多かったが、生徒によっては、一つの手法で何回か回数を重ねる方がよい場合もあると考える。生徒の特徴や様子によって教育実践者がその生徒にあった手法を提供できるようにさまざまな手法を習得しておく必要がある。

また、生徒と教育実践者、1対1の授業が比較的多い特別支援学校の場合、取り組んだことの教育実践者のふり返りが一人よがりになることもあるように感じる。他者的な視点として生徒からの評価はもちろんのこと教育実践を報告し、ケース会議をもつことが必須といえる。

生徒の自己理解の効果を検証するために、授業前後に文章完成法のワークシートを取り入れるようにするとよい。

V. 総合考察

研究1.2の結果から特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性を次のように考える。

アートセラピーの知名度が低いことや診断や治療といった医療現場でのアートセラピーをイメージすることが多く、教育現場で教育実践として取り入れていくためには、アートセラピーの特色の説明と実際に教職員がアートセラピーを体験することによって理解が深まる。アートセラピー的教育実践は、自立活動に関する教育活動全般においてと美術教育活動との関係性があると示唆された。どのように教育実践していくかは生徒の実態に応じた見極めが大切である。障害種別により教育課程に特徴があるので今後も生徒理解という視点にたち、美術教育の授業においてや自立活動に関する教育活動全般において取り組んでいきたい。

また、本研究の結果、アートセラピー的なアプローチをおこなうことによって生徒の理解が深まり今

後の支援の手立ての構築の一つの手法として活用していくことができる可能性があることが示唆された。

集団で取り組んだ方がよいか、個人で取り組んだ方がよいか生徒の実態に応じた取り組みが必要である。コラージュという同じ手法であっても集団と個人とではねらいにも違いがあり生徒によってどのような支援が必要なのか明確にしていくことが大切である。そのためには、さまざまなアートセラピーの手法を熟知していることや生徒に応じた内容にアレンジするなど支援の方法の研究をしていくことが必要である。アートセラピーには、さまざまな手法があるので美術の視点だけ（絵を描くことが好きでないなど）で捉えて取り組むのをやめるのではなく、感覚刺激からの気づき、非言語のコミュニケーションとしてなど表現活動として生徒の実態に応じたアプローチの方法を考え教育実践していきたい。

謝辞

本研究の調査および教育実践に快くご協力いただいた三重県特別支援学校の図工・美術担当者および自立活動・教務担当者の方、研究校の方また、スーパービジョンをして頂いた岡田 珠枝氏、杉野 健二氏に心からお礼を申し上げます。

参考文献・サイト

- 1) 福井県立南養護学校中学部：「こころの色 こころの形—感じ取る心・わき上がる表現」, 2007
- 2) 林 孝子：「それぞれの疾病に対する教育的立場の配慮と指導—疾病の病理に関する情報の共有化と自立活動の充実を図る指導のあり方—」, 2004
http://www.kochinet.ed.jp/center/kenkyu/h_16/10-hayashi.pdf
- 3) 金子光史：「アートびっくり箱」学研, 2008
- 4) 水島恵里奈：「色彩の可能性」神戸大学修士論文要録, p.87-89, 1998/3
- 5) 文部科学省：「特別支援学校学習指導要領」, 2009
- 6) 森谷寛之：「子どものアートセラピー」金剛出版, 1995
- 7) 森谷寛之：芸術療法. 田嶋誠一編「臨床心理面接法2」誠信書房, pp.98-153, 2007
- 8) 関則雄：「新しい芸術療法の流れ クリエイティブ・アーツセラピー」フィルムアート社, 2008
- 9) 関則雄：「月刊学校教育相談」ほんの森出版, p.124-129, 2004/1
- 10) 瀬崎真也：「創造的アートセラピー」黎明書房, 2007
- 11) 柴崎千桂子：「アートセラピーワークブック」BAB ジャパン, 2008
- 12) 度会特別支援学校：「実践わたらい第19集」, 2008年度
- 13) 山上榮子, 山根路：「対人援助のためのアートセラピー」誠信書房, 2008



Figure 29 特別支援学校 A 校 鑑賞（パラシュートの中）活動の様子



Figure 30 特別支援学校 B 校 第 1 回目「コラージュ」作品

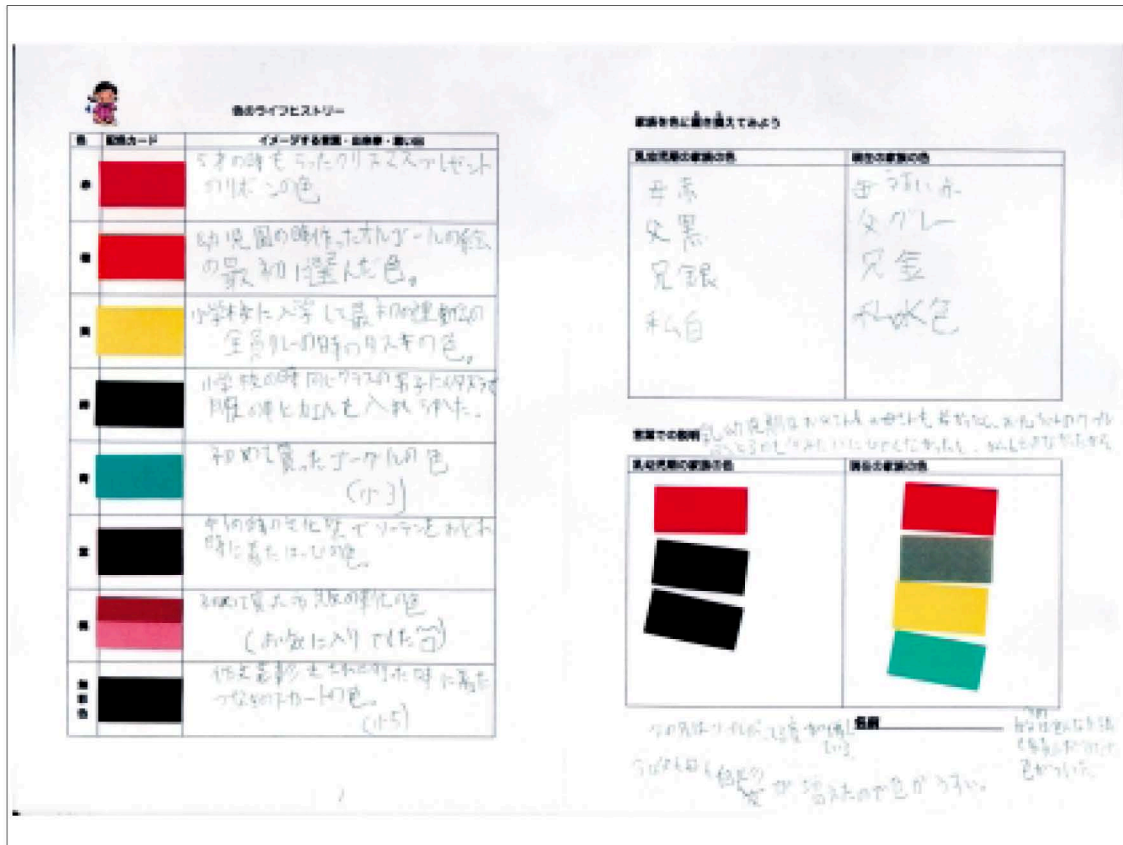


Figure 31 特別支援学校 B 校 第 2 回目「色のライフヒストリー」作品

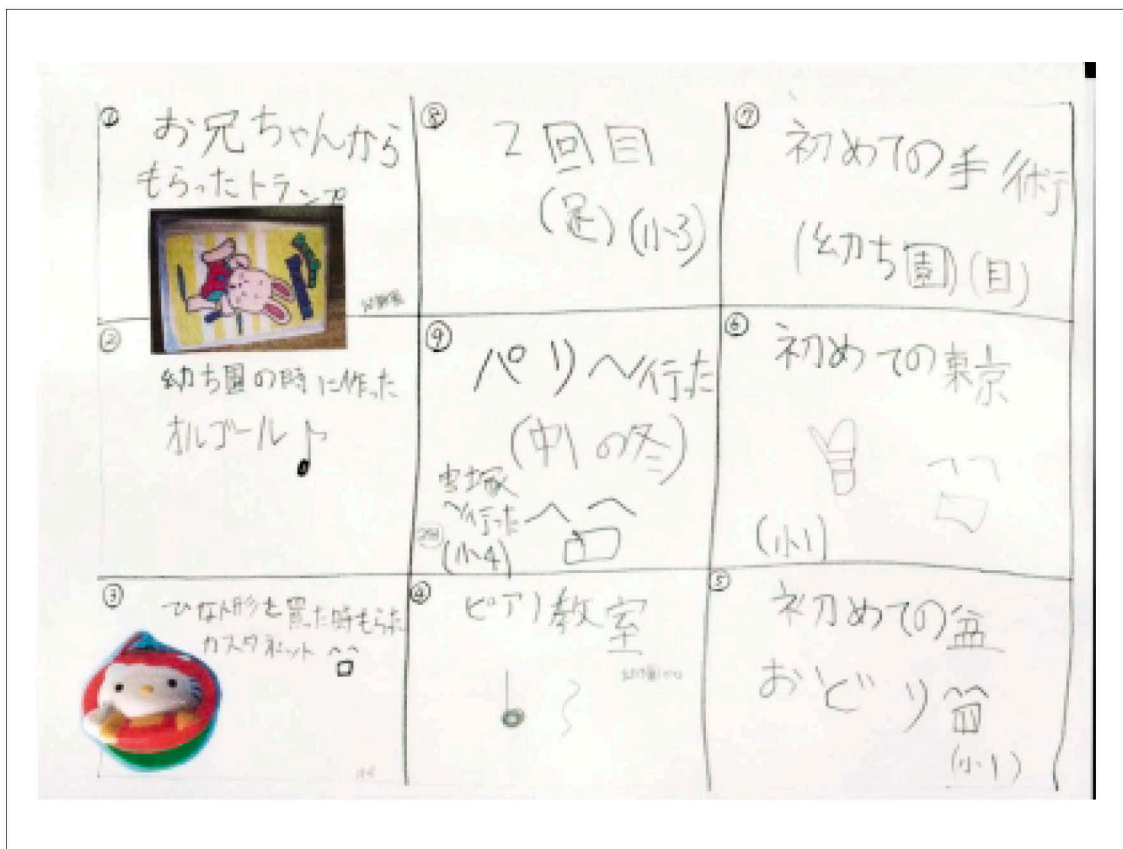


Figure 32 特別支援学校 B 校 第 3 回目「9分割統合絵画法」作品